舞台遺跡

―緊急発掘調査報告書―

1984

東部町教育委員会

舞　台　遺　跡

―緊急発掘調査報告書―

1984

東部町教育委員会

序にかえて

滋野地区の圃場整備事業に伴い、塚穴・天神・鞍掛の三遺跡と、東部高校が開校六十周年記念事業として、校庭の拡張に伴う舞台遺跡の緊急発掘調査をすることになり、町教育委員会はこの発掘調査を「遺跡発掘調査団」に委託し、団長五十嵐幹雄氏（第二次団長教育長）・調査主任塩入秀敏氏を中心にして、発掘調査を完了することができた。

このたび、この遺跡の発掘調査結果を塚穴・天神・鞍掛遺跡と、舞台遺跡の二分冊の報告書にまとめ刊行することにした。

この報告書によれば、舞台遺跡は、求女沢川の形成する河岸段丘上に位置し、遺跡周辺はゆるやかな南斜面の台地となっている。この遺跡からは、土壙・柱穴(縄文・弥生のもの・時代不明のもの）がかなり多く発見された。更に中世以降のものと思われる溝状遺構をはじめ縄文・弥生時代の土器・平安・中世のものと思われる遺物が多量に出土した。

これらの遺構・遺物は、ともに烏帽子山麓のれい明期解明の貴重な資料としても役立ち、一帯の開発の歴史究明のための手がかりになると思う。

このようにして遺跡の発掘は、充分にその目的がはたされ、所期の成果をあげることができた。

発掘調査にご尽力いただいた団長五十嵐幹雄氏・調査主任塩入秀敏氏をはじめ調査員堀田雄二氏・宮原洋子氏・西沢浩氏ほか調査団の方々に、またいろいろご便宜をいただいた土地所有者のみなさんや、地元関係者の方々に厚くお礼申しあげます。

昭和59年３月１日

東部町教育委員会教育長　小林　清美

例　　言

1．本書は、昭和58年に行なわれた長野県小県郡東部町所在の舞台遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査によって、コンテナ40箱分にのぼる厖大な量の出土遺物があったため、それらについて十分な検討を加えることができなかった。本書では、資料の紹介に重点を置き、記述は最少限に止めることとした。

3．整理作業は、塩入秀敏の指導により西沢浩・堀田雄二・宮原洋子・尾見智志・塩崎幸夫・斉藤信子・渡辺待子・高藤ふじ江・土屋八百枝・上田東高校日本史研究班があたった。

4．本書の編集は塩入秀敏と堀田雄二が行ない、遺構および遺物の実測・整図は塩入秀敏・西沢浩・堀田雄二・宮原洋子・西嶋　力・保坂富男・尾見智志・塩崎幸夫が分担して行なった。また執筆者はそれぞれ文末に記したとおりである。

5．図中の北は磁北を示し、レベルは各遺跡ごとにおけるベンチマークとの比高（単位：cm）を記した。遺跡のベンチマークの海抜高度は次のとおりである。

　舞台遺跡……542.6m

6．今年度実施された遺跡の発掘調査における遺物・実測図および写真は、東部町教育委員会が全て保管している。

7．石器類の石質・地層（塚穴遺跡）については、赤塩一巳氏に鑑定していただいた。

8．本書が上梓されるまでには、数多くの人々・諸機関から御協力を賜った。記して深く感謝の意を表したい(敬称略)。

　森嶋　稔・川上　元・児玉卓文・森山公一・長野県東信土地改良事務所・地元圃場整備委員・長野県小県東部高校・東部町産業課

　また、発掘調査に熱心に参加された作業員の皆様・調査のスムーズな進行に御協力をいただいた東部町教育委員会に感謝申し上げたい。

目　　次

序にかえて
例　　言
第Ⅰ章　舞台遺跡の調査……1
　第1節　発掘調査の経過……1
　第2節　調査結果……3
　　1．調査の概略……3
　　2．検出された遺構……4
　　3．出土した遺物……26
　　(1)縄文時代の遺物
　　(2)弥生時代の遺物
　　(3)歴史時代の遺物
　第3節　考察とまとめ……50

第Ⅰ章　舞台遺跡の調査

第１節　発掘調査の経過

舞台遺跡発掘調査日誌

６月９日（木）　現場へ器材を運搬、テント設営を行なう。調査の諸打ち合わせを行なう。

６月10日（金）　舞台遺跡発掘調査開始。現況写真撮影。現場の草刈り作業を行なった後、調査範囲の検討及び土層観察のため、試掘グリッドを設定し、掘り上げる。

６月11日（土）　試掘調査にもとづき、重機による表土除去作業を行なう。

６月14日（火）　鍬入れ式を行なう。グリッド（３×３ｍ）を設定し、グリッド掘り上げ作業に着手する。

６月17日（金）　グリッドを拡張する。遺構（ピット・土壙）が多数検出される。

６月20日（月）　検出された遺構（主に土壙）の写真撮影を行なう。

６月22日（水）　遺構掘りに着手する。西南隅に土層観察のためトレンチを設定、掘り上げる。

６月25日（土）　遺構のセクション実測に着手する。

６月27日（月）　遺構の写真撮影（セクション及び完掘後）を始める。

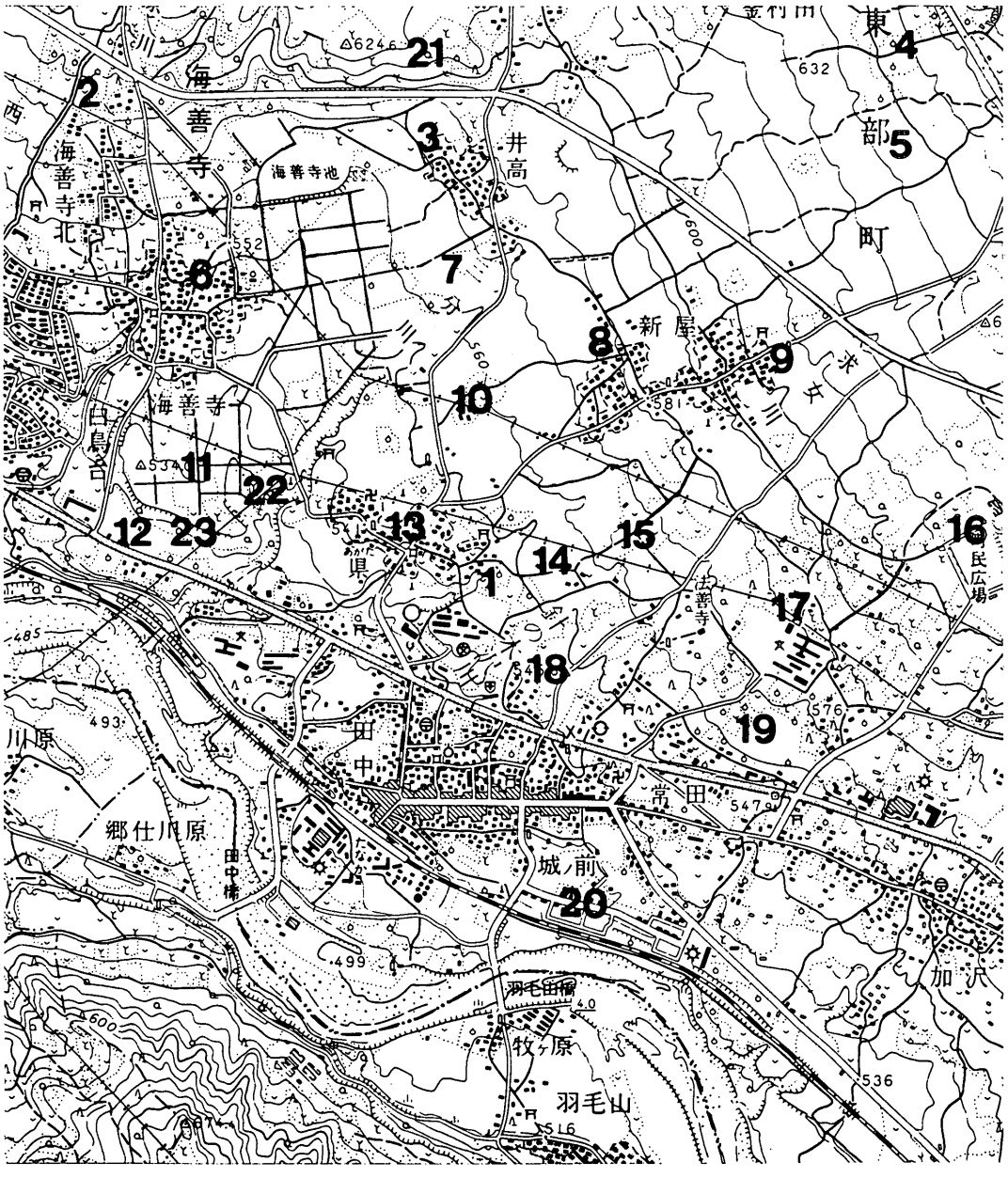
７月２日（土）　調査区全体の平面実測を開始する。遺構掘り上げ作業も継続中。

７月７日（木）　調査区全体の写真撮影を行なう。

７月８日（金）　遺構の再検討及び実測図の確認を行なう。写真撮影。

７月９日（土）　器材撤収、ベンチ移動を行なう。舞台遺跡発掘調査を終了する。

（宮原洋子）



1．舞台遺跡　2．上権田遺跡　3．井高遺跡　4．山の越遺跡　5．森下遺跡　6．桃畑遺跡
7．鍛冶屋遺跡　8．古賀礼遺跡　9．七ッ石遺跡　10．石原田遺跡　11．大門田遺跡　12．長縄手遺跡
13．屋敷遺跡　14．西五町遺跡　15．東五町遺跡　16．下河原遺跡　17．薬師遺跡　18．針ノ木沢遺跡
19．伊勢原遺跡　20．城ノ前遺跡

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節　調　査　結　果

1　調査の概略

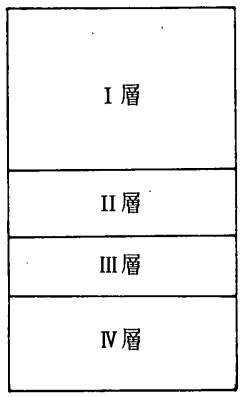
今回の調査は、東部高校グランド拡張工事に伴ない、緊急発掘調査を行ない記録保存をすることを目的とするものである。

舞台遺跡は東部町県地区の舞台地籍にある。今回調査区域とされたのは東部高校北側にあたる。グランドとは数mの段差をもって隣接しており、周辺の形状からみると、かつてはゆるやかな斜面状を呈していたが、グランド造成に伴ないかなりの掘削が行なわれたと思われる。本遺跡は調査区域南側地域にも広がりをみせていたとされるが、現在東部高校の敷地等としてその大半が失なわれている。また調査区域北側の畑にも広がりをみせ、現在でも土器、石器等が表採される。舞台遺跡の全体範囲からみると、今回の調査区域は遺跡の最北端と言えよう。

調査においては、縄文期から中世に至るまでの広範な時期の遺物が得られ、また土壙、ピットもかなり多く検出された。また集石遺構・溝状遺構・うね状遺構も検出された。時期的にもかなりの幅をもち、また多種の遺構が検出されており本遺跡の特徴を知る上でも貴重な調査であったと思われる。

次に土壙、ピットが検出されたのは遺跡西側部分に集中し、東側部分では集石や自然の流れ込みと思われる石群がみられ、地続きながら大きな相違がみられた。

次に層位については、下記に地質層序の模式図を示した。これはトレンチー4を例にとったものであるが、遺跡検出面はⅢ層の上位部分にあたる。



Ⅰ　灰褐色砂質層（耕作工）
Ⅱ　黒褐色砂質層
Ⅲ　暗黄褐色砂質層
Ⅳ　黄褐色砂質層

第2図　層序模式図

2、検出された遺構

本遺跡において検出された遺構としては、土壙28基・ピット324基・集石遺構１基・溝状遺構１基・その他の遺構として列石遺構１基・うね状遺構23基がみられた。

検出された遺構についての個々の説明を行なう前に、遺構検出状況等について説明を加えることとする。まず遺跡のほぼ中央部に北東側から南西側にかけて、幅約３ｍ内外の未掘部分を残した。これは排水管の埋設設備とのことであった。この設備は２枚の畑のほぼ境に設置されたものであり、この西側部分と東側部分との遺構検出面の地質には相違がみられた。遺構検出面は北から南にゆるやかな傾斜面を呈し、日当り良好な生活に適した環境であったと推定される。西側部分は黄色の火山灰土が堆積し、やや地質は堅いものの遺構検出は比較的容易であった。これに対し東側部分は発掘時においては畑となっていたが、以前は水田として利用されていたとの話もあり、地質等は西側部分と地続きながら大きく異なっている。この土質は、いわゆる「こび」と地元の人の言う、細かい石を多量に含み粘性の強い黒褐色土層であった。土が非常に堅く、ガリガリであって、また黒褐色の土でもあり遺構検出においては困難があった。以上のことから、本遺跡における遺構のほとんどが、西側部分において検出されている。最後に、南隅にみられた大小の礫群については、トレンチによる観察によると、細かな石粒、砂粒等が礫群周辺および礫群下に多量にみられ、自然の流れ込みによるものと考えられる。

（１） 土壙〔ＳＫ〕

土壙としてとらえた遺構は31基を数えた。しかしながら、当初土壙としたもののピットとすべき遺構が３基あり、これらについての説明は省略することとするので、土壙番号が一部欠如することを予め記しておく。土壙は28基検出されたが、これらは隅丸方形、あるいは隅丸長方形を呈するものが多く、また比較的大型のものである。

ＳＫ－01　（第６図）

グリッドＣ－１において検出された。プランは南北に100㎝、東西に90㎝を計り、不整方形を呈する。壁は一様でなくダラダラと落ち込む部分と、やや急斜して落ち込む部分とがみられる。また底部は水平ではなく凹凸が著しい。本址は一応土壙としてとらえたが、耕作において何らかの形で形成されたものと考えられる。

ＳＫ－02　（第５図）

グリッドＢ・Ｃ－１～２にかけて検出された。プランは290×200㎝を計り、長方形を呈する。深さは約25㎝である。底部はほぼ水平レベルであり、底面に60×30㎝を計る楕円形の凹みを有する。出土遺物は弥生土器片１、土師器片２、須恵器片１、土師質土器片６がある。

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
SK-01
SK-02
SK-03
SK-05
SK-07
SK-08
SK-09
SK-10
SK-11
SK-12
SK-13
SK-14
SK-15
SK-16
SK-17
SK-18
SK-19
SK-20
SK-21
SK-22
SK-26
SK-27
SK-28
SK-29
SK-30
SK-31
U-04
U-05
U-06
U-07
U-08
U-09
U-10
U-11
U-12
U-13
U-14
U-15
U-16
U-17
U-18
U-19
U-20
U-21
U-23
U-24
暗渠
SX-01
SXb-01
SD-22
トレンチ2
トレンチ4
0
4 m

第3図　発掘区全体図

ＳＫ－03　（第３図）

グリッドＢ・Ｃ－2 ～３にかけて検出された。プランは 290 × 140 cm を計り、形状は隅丸長方形を呈する。深さ約25cmである。遺構内には、掘り切りからやや落ち込み１段の平らな部分をもち、そこから底部にかけてゆるやかに落ち込んでいく。この平らな部分は比較的堅い。底部はやや凹みのみられるものの、ほぼ水平レベルである。出土遺物には弥生土器片１、土師器片１、土師質土器片19、陶器片１がある。

ＳＫ－05　（第３図）

グリッドＢ－３において検出された。プランは 220 × 210 cm を計り、不整円形を呈する。深さ約15cmである。東壁の一部は２つのピットにより切られている。また遺構内には 30× 100 cmの範囲で焼土が残されている。遺構内に焼土をもつものは本址だけであるが、土壙内に炭化物を含むものが数基みられ、それらとの関連性も考えられる。出土遺物には縄文土器片７、石鏃未製品1、完成品１、チップ、フレイクがみられ、土師器片、土師質土器片各２点みられた。土師器片等はみられるものの、縄文期の遺構と思われる。

ＳＫ－06　（第７図）

グリッドＣ－３において検出された。プランは90×60cmを計る。底部はほぼ水平レベルであり、深さ５cm前後と浅い。出土遺物はない。

ＳＫ－07　（第７図）

グリッドＤ－３において検出された。プランは 180 × 130 cmの隅丸方形を呈す。底部はほぼ水平レベルで、深さ約10cmである。中央部に凹みをもつ。出土遺物はない。

ＳＫ－08　（第７図）

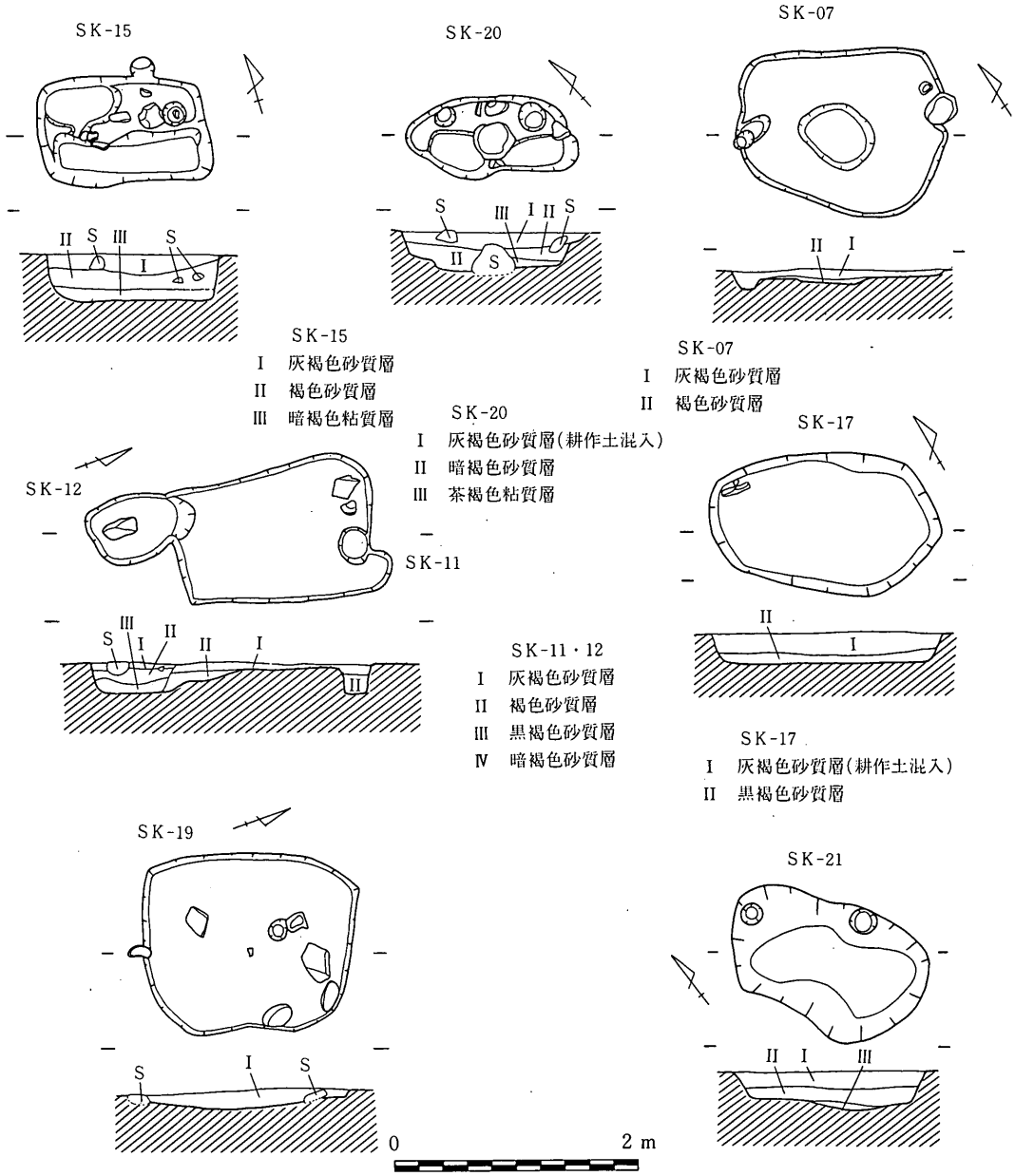
グリッドＤ－４において検出された。プランは 120 ×90cmの隅丸方形を呈す。深さ約10cm強で、底部はほぼ水平レベルである。出土遺物は弥生土器片１点がある。

ＳＫ－09　（第７図）

グリッドＣ・Ｄ－４において検出された。プランは90×60cmの楕円形を呈す。深さは20cmである。底部はゆるやかな凹み状を呈する。出土遺物は縄文土器片１点がある。

ＳＫ－10　（第３図）

グリッドＢ・Ｃ－３～４にかけて検出された。長軸 250 cm、短軸は東側部分で 130 cm、西側部分で90cmとなり鍵状を呈する。深さは20cm弱である。また、遺構壁際に２基のピットを有する。



SK-15
I　灰褐色砂質層
II　褐色砂質層
III　暗褐色粘質層

SK-20
I　灰褐色砂質層(耕作土混入)
II　暗褐色砂質層
III　茶褐色粘質層

SK-07
I　灰褐色砂質層
II　褐色砂質層

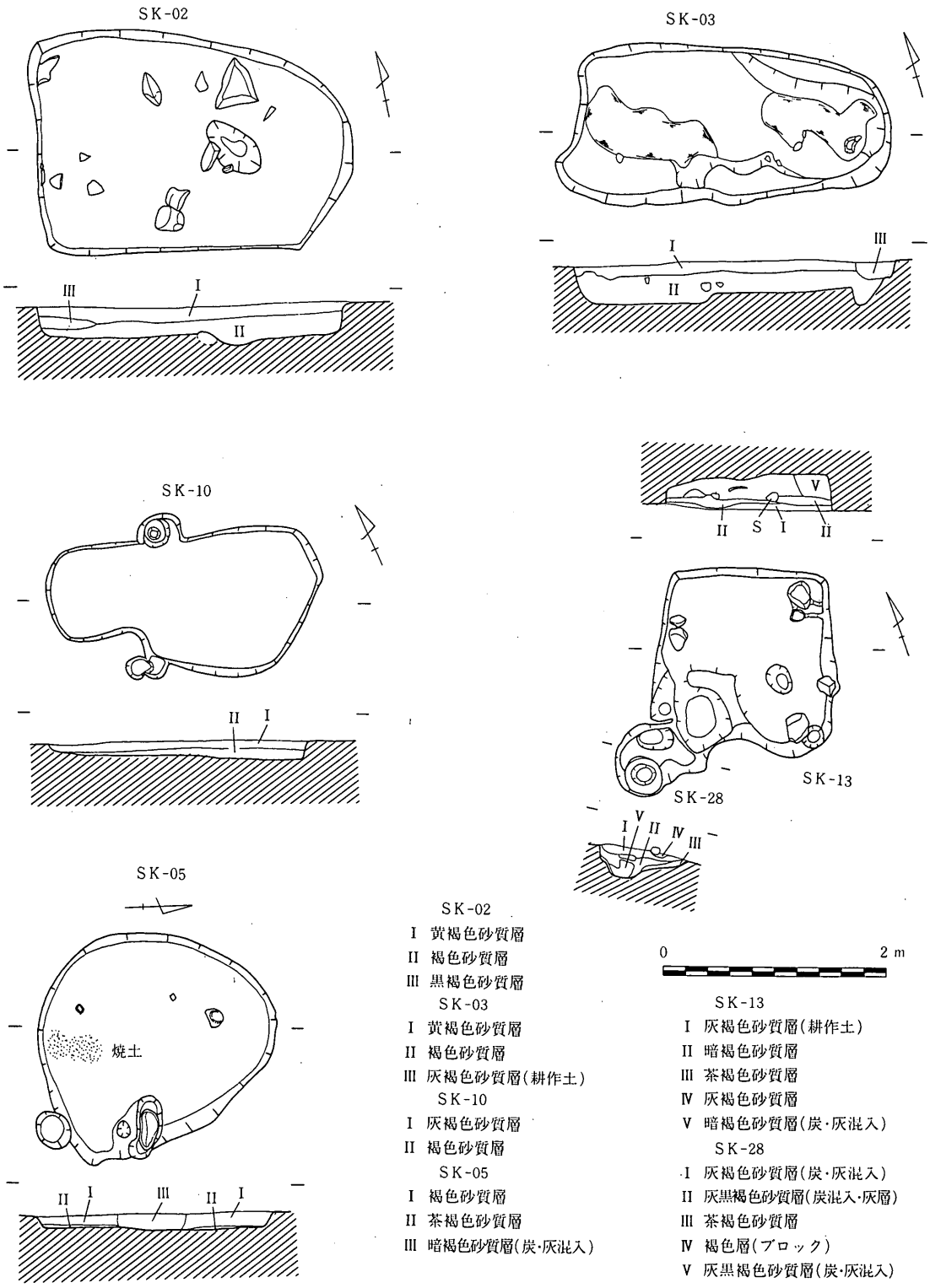
SK-11・12
I　灰褐色砂質層
II　褐色砂質層
III　黒褐色砂質層
IV　暗褐色砂質層

SK-17
I　灰褐色砂質層(耕作土混入)
II　黒褐色砂質層

SK-19
I　灰褐色砂質層(耕作土混入)

SK-21
I　灰褐色砂質層
II　暗褐色砂質層
III　茶褐色粘質層

第4図　土壙実測図



SK-02
I 黄褐色砂質層
II 褐色砂質層
III 黒褐色砂質層

SK-03
I 黄褐色砂質層
II 褐色砂質層
III 灰褐色砂質層(耕作土)

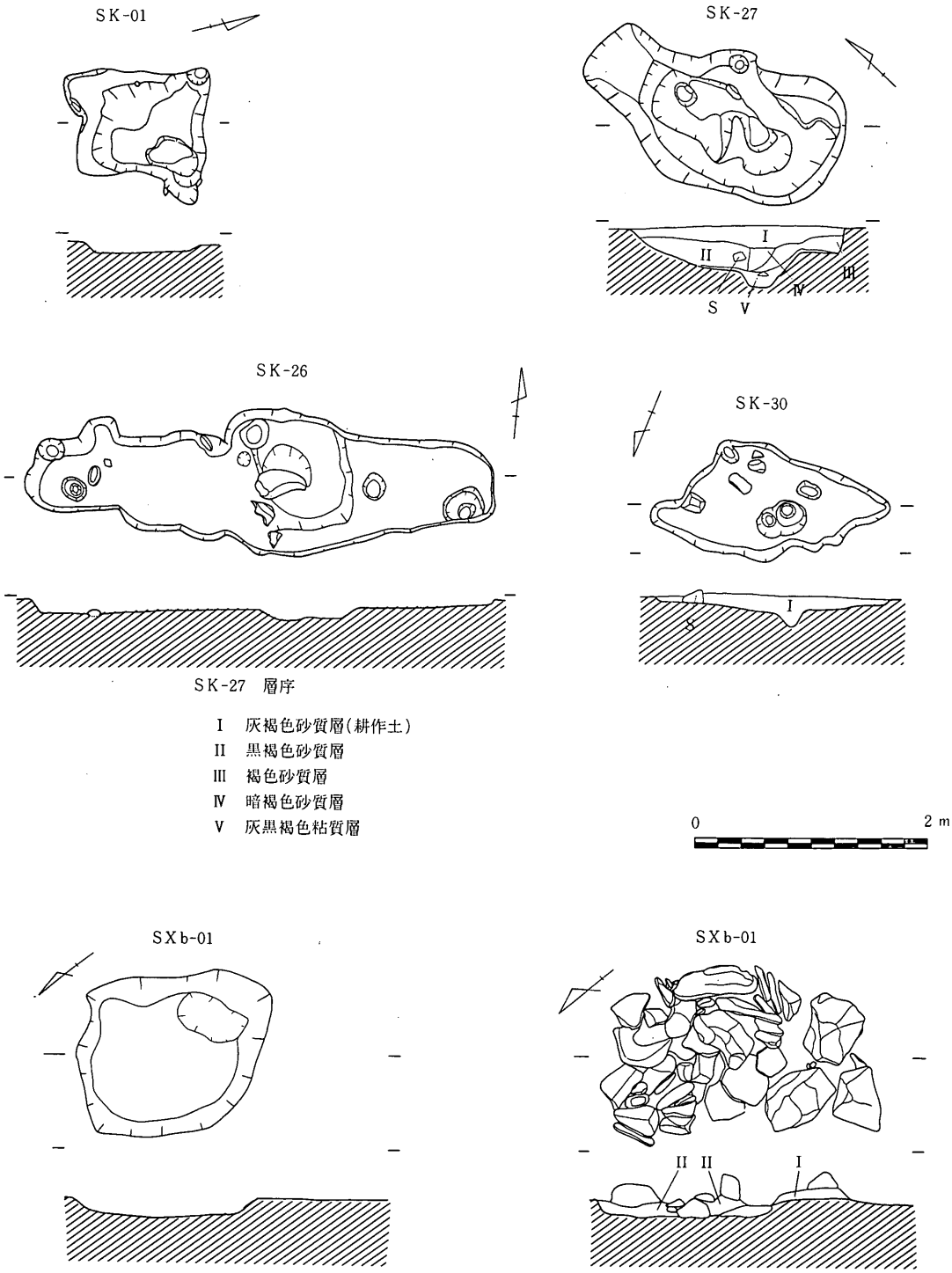
SK-10
I 灰褐色砂質層
II 褐色砂質層

SK-05
I 褐色砂質層
II 茶褐色砂質層
III 暗褐色砂質層(炭・灰混入)

SK-13
I 灰褐色砂質層(耕作土)
II 暗褐色砂質層
III 茶褐色砂質層
IV 灰褐色砂質層
V 暗褐色砂質層(炭・灰混入)

SK-28
I 灰褐色砂質層(炭・灰混入)
II 灰黒褐色砂質層(炭混入・灰層)
III 茶褐色砂質層
IV 褐色層(ブロック)
V 灰黒褐色砂質層(炭・灰混入)

第5図　土壙実測図


SK-01
SK-27
I
II
III
IV
S
V
SK-26
SK-30
I
S
SK-27 層序
I 灰褐色砂質層(耕作土)
II 黒褐色砂質層
III 褐色砂質層
IV 暗褐色砂質層
V 灰黒褐色粘質層
0
2 m
SXb-01
SXb-01
II
II
I

第6図 土壙・集石実測図

特に北側のピットは遺構内に構築され、それを囲うように土壙の壁が形成されている。このピットは深さ40cmを計る。出土遺物は土師器片１、土師質土器片５がある。

ＳＫ－11、12　（第４図）

グリッドＢ－４において検出された。ＳＫ－11と12は切り合い関係にあるが、その新旧は判明しなかった。ＳＫ－11は160×130cmを計り、底部はほぼ水平で深さ５cmである。ＳＫ－12は90×60cmを計り、深さ30cm弱である。覆土内にはわずかながら骨片が存在した。出土遺物はＳＫ－11が、縄文土器片２、土師質土器片３、ＳＫ－12が、土師質土器片１、磨石１である。

ＳＫ－13、28　（第５図）

グリッドＣ－４～５にかけて検出された。ＳＫ－13と28は切り合い関係にあるが、その新旧は判明しなかった。ＳＫ－13は170×160cmの隅丸方形を呈す。底部はほぼ水平レベルで深さ30cmを計るが、南隅には底部に盛土を残し凹み状の落ち込みを有する。また覆土内に比較的大きな骨片が含まれ、炭化物がかなり混入している。ＳＫ－28は直径60cmの不整円形を呈する。深さ30cmを計る。遺構内には２基のピット状の落ち込みを有している。覆土には炭や灰が相当量含まれ、また焼石も多く含まれており、炉的な性格を有するものと思われる。出土遺物はＳＫ－13が、縄文土器片２、フレイク１、弥生土器片２、土師器片１、土師質土器片４、ＳＫ－28が土師質土器片６がみられた。

ＳＫ－14　（第７図）

グリッドＢ－５において検出された。プランは100×80cmの不整円形を呈する。深さ15cm程度でやや浅く、底部は２段となっている。出土遺物はない。

ＳＫ－15　（第４図）

グリッドＢ・Ｃ－５・６にかけて検出された。プランは140×90cmの隅丸長方形を呈す。底部には北東部が平たく中位に残され、そこからさらに落ち込む。１段目が深さ約15cm、最も低い部分で約40cmである。また覆土にはわずかながら骨片が存在した。出土遺物は縄文土器片１、土師器片２、須恵器片１、土師質土器片１があり、他にフレイク、磨石がみられた。

ＳＫ－16　（第７図）

グリッドＢ－６において検出された。直径約110cmの円形を呈する。東西の壁はピットにより破壊されている。底部はほとんど水平レベルで、深さ20cmを計る。出土遺物は縄文土器片１、土師質土器片３がある。

ＳＫ－17　（第４図）

グリッドＢ－７において検出された。プランは190 × 110 cmの楕円形を呈する。底部はほとんど水平レベルで、深さ30cm弱である。出土遺物は縄文土器片２、弥生土器片３、土師器片１、須恵器片２、土師質土器片６があり、他に石庖丁未製品、フレイクがある。

ＳＫ－18　（第７図）

グリッドＢ－５～６にかけて検出された。プランは110×60cmの楕円形を呈する。底部中央部には直径40cmを計る丸石が埋まっている。出土遺物はない。

ＳＫ－19　（第４図）

グリッドＣ・Ｄ－６～７にかけて検出された。プランは180×150cmの隅丸方形を呈する。底部はなだらかな凹状を呈し、深さ15cmを計る。出土遺物は縄文土器片３、土師質土器片１がある。

ＳＫ－20　（第４図）

グリッドＥ－４～５にかけて検出された。プランは140×70cmの楕円形を呈する。底部はほぼ中心部に埋まった丸石を境とし、南側がやや低く段差をもって構築されている。深さは南側が30cm、北側が20cmである。出土遺物はない。

ＳＫ－21　（第４図）

グリッドＤ・Ｅ－４～５にかけて検出された。プランは170×100cmの楕円形を呈する。底部はやや傾斜はあるものの、ほぼ水平レベルである。また壁の下場は中心部のやや凹む、ひょうたん状の形をもつ。深さは約25cmである。出土遺物は縄文土器片２、打製石斧１、フレイクがある。

ＳＫ－24　（第７図）

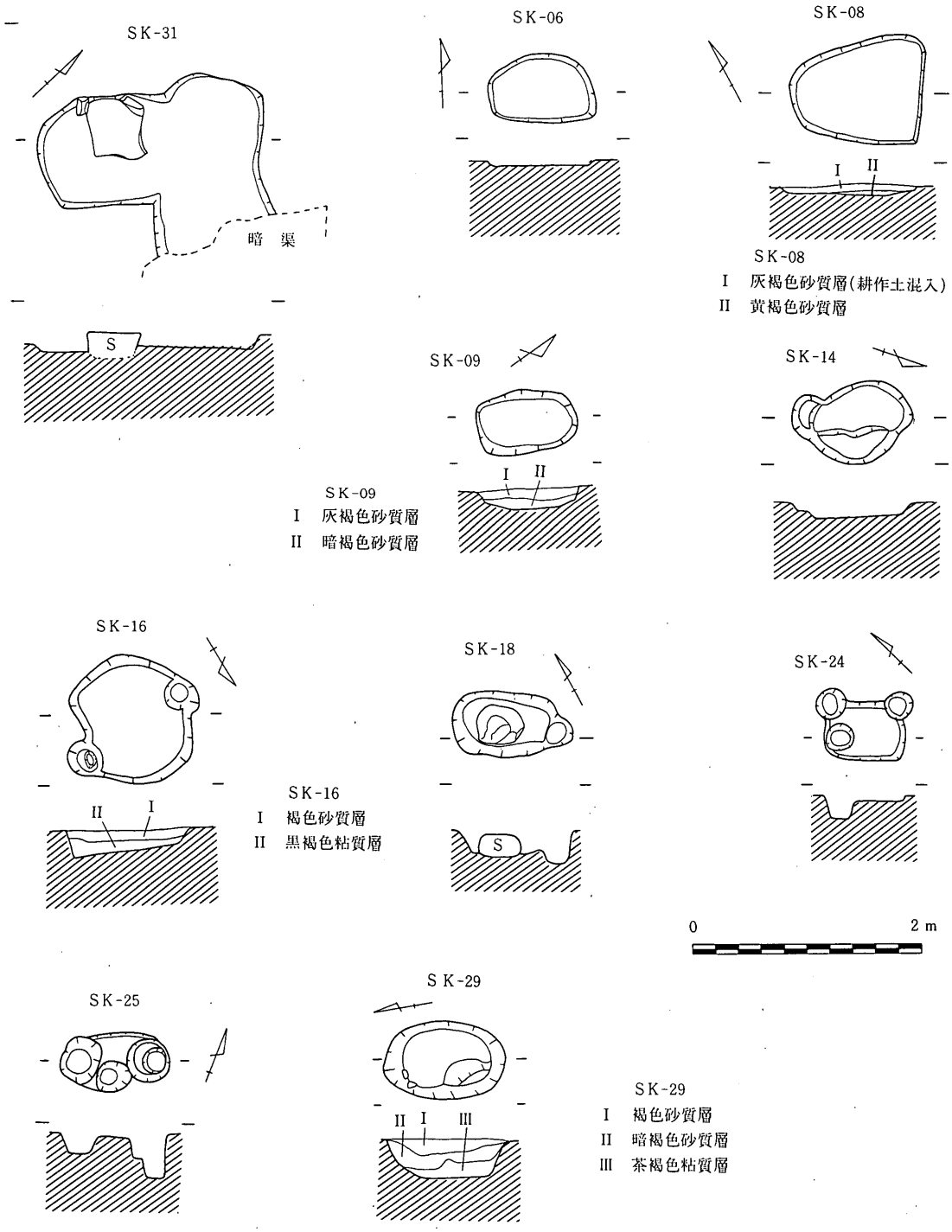
グリッドＦ－３において検出された。プランは70×50cmの長方形を呈する。底部はほぼ水平レベルで、深さ５cm前後と非常に浅い。また、本址を壊す形で３基のピットが構築されている。出土遺物はない。

ＳＫ－25　（第７図）

グリッドＦ－３において検出された。プランについては、本址構築後のものと思われるピット３基により、ほとんど壊されており不明である。底部は一部が残され、深さ５cmと浅い。出土遺物はない。

ＳＫ－26　（第６図）

グリッドＦ・Ｇ－３において検出された。プランは長軸400 cm、短軸130 cmを計り、中央部が


SK-31
暗 渠
S
SK-06
SK-08
I
II
SK-08
I 灰褐色砂質層(耕作土混入)
II 黄褐色砂質層
SK-09
I
II
SK-09
I 灰褐色砂質層
II 暗褐色砂質層
SK-14
SK-16
II
I
SK-16
I 褐色砂質層
II 黒褐色粘質層
SK-18
S
SK-24
0
2 m
SK-25
SK-29
II
I
III
SK-29
I 褐色砂質層
II 暗褐色砂質層
III 茶褐色粘質層

第7図　土壙実測図

やや膨らむ不整楕円形を呈する。底部は壁際からゆるやかに傾斜し、ほぼ中心部で1段低くなる。また遺構内に5基のピットが構築されているが、本址に伴なうものではないと思われる。遺構内には炭化物が混在していた。出土遺物は縄文土器片4がある。

ＳＫ－27　（第6図）

グリッドＦ・Ｇ－2において検出された。プランは230×120㎝の隅丸長方形に近い形状を呈する。底部は壁際よりゆるやかに傾斜し、中心部が1段低い段差をもつ。深さは最低部で50㎝、その他は約20～30㎝である。出土遺物は縄文土器片5、弥生土器片8、他にフレイク、ピエス・エスキーユ（両極石器）がある。

ＳＫ－29　（第6図）

グリッドＤ－5において検出された。プランは110×70㎝の楕円形を呈する。底部はほぼ水平レベルで深さ約30㎝である。出土遺物は縄文土器片5がある。

ＳＫ－30　（第6図）

グリッドＣ－6において検出された。プランは210×105㎝を計り、中央部に膨らみをもつ不整楕円形を呈する。底部は中心に向かってゆるやかな傾斜をもち3基のピットを有する。これらのピットは本址に伴なうものではないと思われる。出土遺物は縄文土器片、弥生土器片、土師器片、須恵器片各1点があり、他にフレイクもみられる。

ＳＫ－31　（第7図）

本址は2基の土壙が切り合い状態であったと思われるが、その新旧は不明であった。ともに短軸は100㎝前後を計る。また一部は耕作により破壊されている。また底部はほぼ水平レベルであり、深さ10㎝弱である。出土遺物はない。

以上、土壙について個々に説明を加えたが、注意すべき点についてまとめておくこととする。

ＳＫ－02、03、10はそれぞれ長軸が275㎝、280㎝、250㎝を計り、長方形に近い形状を示す。また主軸はＳＫ－02がＮ－11°－Ｅ、03および10がＮ－19°－Ｅにとり、ほぼ同方向を示している。また出土遺物はともに土師質土器を主体としている点においても、似通った様相をみせている。詳細は不明ながら、時期的にも、性質的にも類似性を示しているものと思われる。

ＳＫ－05については、本遺跡においては比較的大きな円形状を示している。床面に焼土を残しており、出土遺物も縄文期のものが多く、黒曜石製品あるいはチップ等が含まれている点についても併せて注意しておきたい。

ＳＫ－13は覆土に多くの炭化物および骨片が含まれている。出土遺物は広範な時期の土器が混

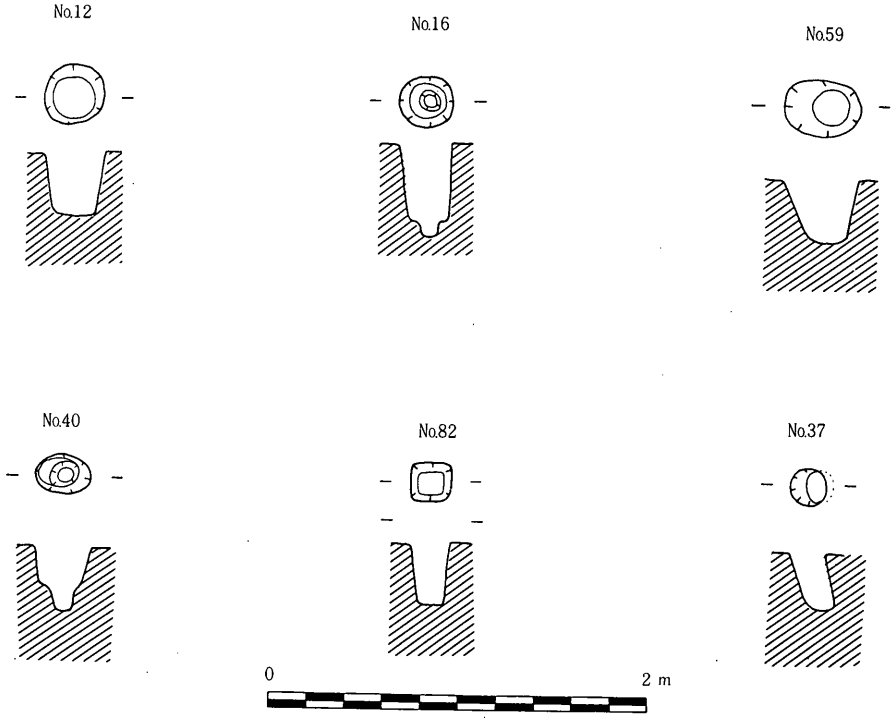
在し、直接的に時期比定することはできないが、土壙墓的可能性が高いと思われる。

ＳＫ－15、20は底部が平らではなく、段差をもって構築される。その意図は不明ながら、土壙の性格を考える上で注意したい。特にＳＫ－15はわずかながら骨片が含まれており、土壙墓的性格をもつものかもしれない。

ＳＫ－07、11、17、19、21、31は長軸が150 cm～180 cmほどで、底部はほぼ水平レベルをもち、形状は長方形を示す一群である。出土遺物については、全く皆無のものもあり、また時期的なばらつきをもっている。土壙の性格については不明な点が多い。

ＳＫ－06、08、09、12、14、16、18、24、25、28、29は長軸100 cm前後を計り、長方形ないし楕円形を示す一群である。これらは出土遺物は断片的であり、また全く出土遺物のないものも多い。しかしながら、ＳＫ－12は覆土内にわずかながらも骨片を含み、ＳＫ－28は覆土に炭や灰がかなり多量に含まれ、また焼石も多く含まれている。この２基については、他と区別しておく必要があろうかと思われる。

ＳＫ－01、26、27、30については、平面形状が整然としていない一群である。出土遺物から土壙構築期を比定できないものの、ＳＫ－26、27には縄文期の遺物が比較的多く含まれている。しかしながら、これらも断片的資料であり詳細については不明と言わざるを得ない。



第８図　ピット実測図

(2)　ピット　〔Pit〕（第８図　第１表）

本遺跡において検出されたピットの総数は324基を数える。これらについては第１表に示したとおりである。表土「推」とあるのは、ピット構築後に何らかの形で一部が失なわれたものについて、推定を加えて示したものである。

これらのピットは、遺跡西側区域において大半が検出されている。

ピットの形状により分類を行なうと下記のとおりである。

円形ピット（不整円形ピットを含む）	217基	67%
楕円形ピット（不整楕円形ピットを含む）	95基	29%
方形ピット	12基	4%

次に、第９図にピットの形状および掘り方による標準形を示してみた。

No.12は円形ピットであり、このタイプが大半を占めている。

No.16は円形ピットの底部２段おちタイプである。20基を数える。

No.59は楕円形ピットである。

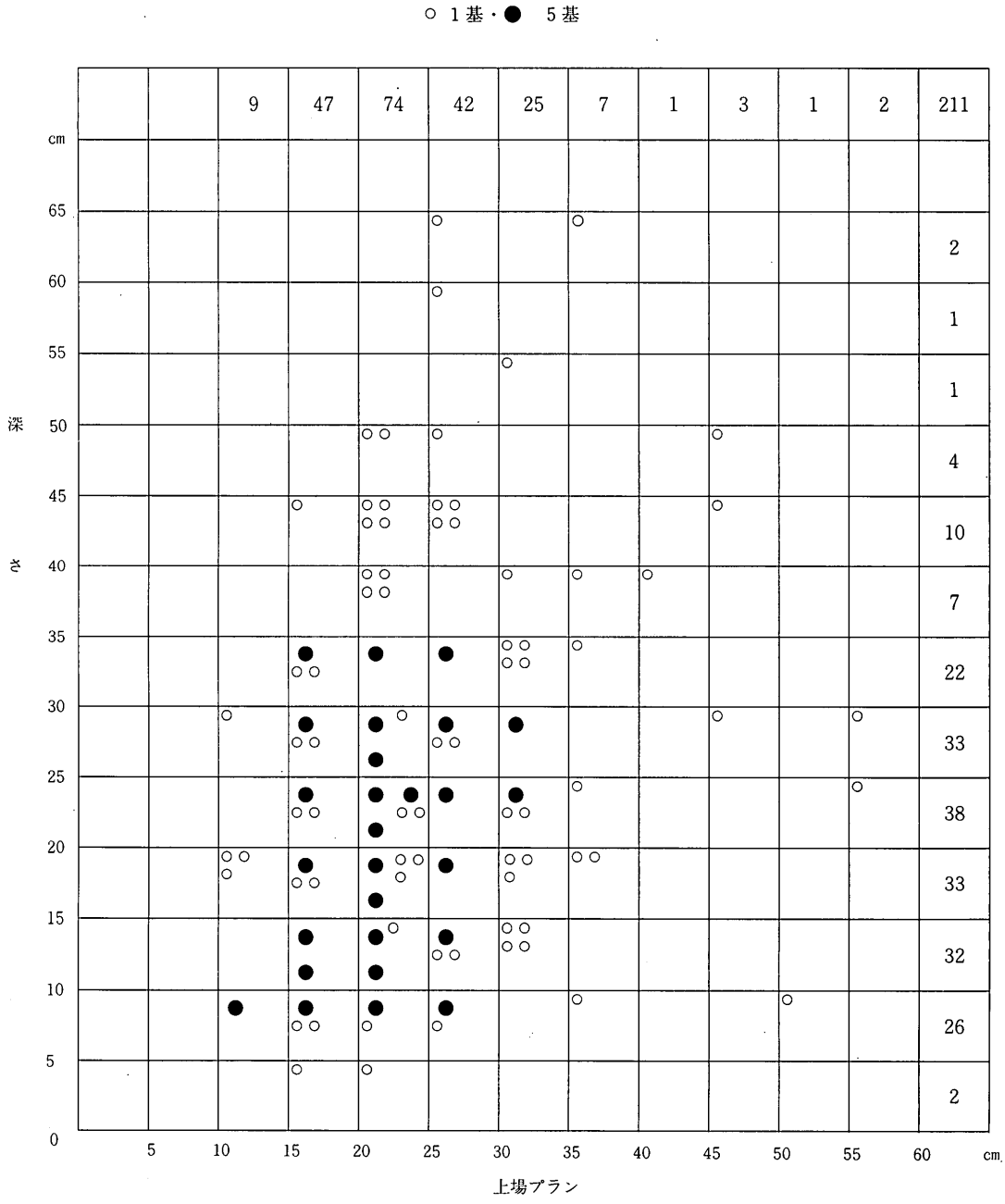
No.40は楕円形ピットの底部２段おちタイプである。９基を数える。

No.82は方形ピットである。図示しなかったが、方形ピットの底部２段おちタイプが２基みられたが、No.16のように掘り方が判然とせずわずかに認められる程度である。

No.37は掘り方が垂直でなく斜め方向から掘り込まれたタイプである。４基を数える。

次に第８図は円形ピットの上場プラン（直径）と深さとの関係を、該当する数により図示したものである。円形ピットは217基を数えるが、深さの不明確なピットについては図からはずしたため、総数211基となっている。これをみると、ややばらつきはみられるものの、上場プランの直径15～30cmが大半を占め、また深さは５～35cmまでが多く、中でも10～30cmまでが半数以上を占めている。一概にタイプ化することはできないと思うが、ピットのまとまり等を知る上で参考になろうかと思われる。

これらのピットのほとんどにおいては、出土遺物はみられず、その構築時期は不詳な点が多い。また、ピットのまとまりについても現在のところ、明確となった部分はないが検出数も多いことから、資料的には良好なものと思われる。



第9図　円形ピット分類図

第1表　ピット　集成表

No.	グリッド	プラン 上場 cm	プラン 下場 cm	深さ cm	形状	備考
1	B－1	25	9×11	13	円形	
2	C－1	35	13×15	15	〃	
3	〃	16	8×13	4	〃	
4	B－2	15	8×10	12	〃	
5	〃	25	10	23	〃	
6	〃	30	9×16	16(22)	〃	2段おち
7	C－2	15×40	10×35	36	楕円形	
8	〃	43×48	35×40	5	方形	Pit－26
9	〃	16×16	12(6)	(24)	〃	2段おち
10	C－3	15	5	26	円形	
11	B－3	20	20×25	20	〃	斜め掘り込み
12	〃	30	20	33	〃	
13	〃	20	11		〃	
14	C－3	推50×30	推25×20	11	楕円形	Pit－05
15	〃	50	なし	7	円形	SK－04
16	〃	30	20(8)	40(50)	〃	2段おち
17	〃	20	8	29	〃	
18	〃	25	推 15	9	〃	
19	〃	30×35	10×20	45	楕円形	
20	〃	20	10	22	円形	
21	〃	18	12	32	〃	
22	〃	25	15	19	〃	
23	B－4	30	20	推 25	〃	Pit－06
24	〃〃	20	15	14	〃	
25	〃〃	17	9	16	〃	
26	C－4	25	17		〃	
27	〃	27×50	10×40	14	楕円形	
28	〃	20	12	10	円形	
29	〃	25	15	32	〃	
30	A－5	40×60	20	20	不整楕円形	
31	〃	20×30	10×15	18	楕円形	
32	〃	20×30	10×15	18	〃	
33	B－5	22	20(6×9)	21	円形	2段おち
34	C－5	33	25	14	〃	
35	〃	30	18×22	14	〃	
36	〃	22×28	12	12	楕円形	
37	〃	18	9×16	28	円形	斜め掘り込み
38	〃	23×32	13×20	13	楕円形	
39	〃	26	17	8	円形	
40	A－6	20×30	15×20(8)	22(34)	楕円形	2段おち
41	〃	25	15	15	円形	
42	〃	30	21	12	不整円形	
43	〃	28	20	23	円形	Pit－09
44	B－6	20×32	13×21	5	楕円形	
45	〃	25	14	33	円形	
46	〃	30	16×20(6×9)	32(36)	〃	
47	〃	28	14	60	〃	
48	C－6	18	11	推 34	〃	
49	〃	26×35	15×22	13	楕円形	
50	〃	30	20	25	円形	
51	〃	27	12	40	〃	
52	〃	20	8	22	〃	
53	〃	25	10	27	〃	
54	〃	30	21(8)	推 (33)	〃	2段おち
55	〃	13×20	6×11	推 18	楕円形	
56	〃	38	15	22	円形	
57	〃	16	9	推 20	〃	
58	〃	25	12(6)	推 27	〃	
59	B－7	30×40	20	32	楕円形	
60	C－7	35×55	30×48(12×20)	5(14)	〃	2段おち
61	〃	19×24	9	26	〃	Pit－10
62	〃	23	16	5	円形	
63	D－1	23	13	37	〃	
64	〃	25×47	10×15, 13×25	29, 39	不整楕円形	底部段差あり

No.	グリッド	プラン 上場 cm	プラン 下場 cm	深さ cm	形状	備考
65	D－1	16	9	10	円形	
66	E－1	22	10	9	〃	
67	〃	30	20	20	〃	Pit－01
68	〃	22	16	44	〃	
69	D－2	23	10	8	〃	
70	〃	22×28	12	26	楕円形	
71	〃	25	10	8	円形	
72	〃	25×33	15×21	6	楕円形	Pit－02
73	〃	22	10×15	15	円形	斜め掘り込み
74	〃	20	12	9	〃	
75	〃	29×35	14×25	6	楕円形	
76	〃〃	32	14	15	円形	
77	〃	30	24	27	〃	
78	〃	28	15	12	〃	
79	〃	22×30	10	18	楕円形	
80	〃	25×43	15×35	35	〃	
81	〃	18	8	6	不整楕円形	
82	〃	22×22	14×14	33	方形	
83	〃	20	11	14	円形	
84	〃	22×27	17(13)	32(44)	方形	2段おち
85	〃	18	10	16	不整円形	
86	〃	15×20	10	10	楕円形	
87	E－2	14×18	8×12	28	不整方形	Pit－3
88	〃	11	9	19	円形	
89	〃	25	13	14	〃	Pit－04
90	〃	30	15	24	〃	
91	〃	35	18×20	60	〃	
92	〃	20×30	12×21	12，18	楕円形	底部段差あり
93	〃	20	10×17	12	円形	
94	〃	25	12	32	〃	
95	〃	22×32	10，10	19，17	楕円形	底部段差あり
96	〃	19	11	14	円形	
97	〃	11	4	7	〃	
98	〃	13	4	7	〃	
99	〃	20×27	18	4	楕円形	
100	〃	20	14	8	円形	
101	〃	35×45	20，20	9，14	楕円形	底部段差あり
102	〃	28×33	19×25	15	〃	No.103と切り合い
103	〃	22	16	17	円形	
104	F－2	20	8	12	〃	
105	〃	16×21	7	9	楕円形	No.106と切り合い
106	〃	18	12	5	円形	
107	〃	23	12	18	〃	
108	〃	30×37	25	25	不整楕円形	
109	〃	25	17	23	円形	Pit－18
110	〃	17×23	10	9	楕円形	
111	〃	16	17	推 34	円形	
112	〃	23×26	11×13	19	方形	
113	〃	20	10	15	円形	
114	〃	26×33	21×28	3	楕円形	
115	〃	20	8	21	円形	
116	D－3	20×23	10	34	楕円形	
117	〃	23	15	8	円形	
118	〃	11×14	4	10	楕円形	
119	〃	20	8	18	円形	
120	〃	25	13	56	〃	
121	〃	23×30	13	12	楕円形	
122	〃	18×23	8	16	〃	
123	〃	18	9×13	25	円形	
124	〃	23×27	13(6)	19(24)	楕円形	2段おち
125	〃	17×32	13×18	15(50)	〃	2段おち，斜め掘り込み
126	〃	25	20	19	円形	
127	E－3	26	18(8)	24(31)	〃	2段おち
128	〃	20	8	15	〃	
129	〃	24	15	4	〃	

No.	グリッド	プラン		深さ cm	形状	備考
		上場 cm	下場 cm			
130	E－3	23×33	16×25	6	楕円形	
131	〃	16×24	7×14	19	〃	
132	〃	26	13	9	円形	
133	〃	30	13×18	25	〃	
134	〃	25	10	21	〃	
135	〃	30	17	15	〃	
136	〃	18×23	11×15	9	楕円形	
137	〃	20	8	22	円形	
138	〃	35×45	16	17	不整楕円形	Pit－25
139	〃	16	8×12	15	円形	
140	〃	18	11	9	〃	
141	〃	22×32	12×20	12	楕円形	
142	〃	27×28	15×20	33	方形	
143	〃	14	8	16	円形	
144	〃	14×34	11×16	20	楕円形	
145	〃	17	7	20	円形	
146	〃	13×18	6×10	11	楕円形	
147	〃	21×28	14×20	23	〃	
148	〃	26×36	15×18	29	〃	
149	F－3	20	8	35	円形	
150	〃	20	15(5)	推24(33)	〃	2段おち
151	〃	15	8	15	〃	
152	〃	26×35	10×16	23	楕円形	
153	〃	22	18	28	円形	
154	〃	25	15	27	〃	
155	〃	23	13	推 20	〃	
156	〃	22	13	推 19	〃	
157	〃	31×39	20	17	楕円形	
158	〃	28	14	14	円形	
159	〃	35	26(14)	22(37)	〃	2段おち
160	〃	18	10	34	〃	
161	D－4	30	20	30	〃	
162	〃	17×22	12×15	20	楕円形	
163	〃	18	12	33	円形	
164	〃	23	11	31	〃	
165	〃	14	10	9	〃	
166	〃	23	18	34	〃	
167	〃	25	15	14	〃	
168	〃	25×34	16×25	13	楕円形	
169	E－4	28×38	18×30	17	〃	
170	〃〃	18	9	10	円形	
171	〃	12	7	9	〃	
172	〃	28×38	17×23(5×11)	29(42)	楕円形	2段おち
173	〃	20	13	13	円形	
174	〃	14	10		〃	
175	〃	13	8	19	〃	
176	〃	18×23	14	18	楕円形	
177	〃〃	17	10	13	円形	
178	〃	17×35	9×18	21	楕円形	
179	〃	14	7	6	円形	
180	〃	30	15	21	〃	
181	〃	22	18(5×13)	11(19)	〃	2段おち
182	〃	20	10	18	〃	
183	〃	17	9	20	〃	
184	〃	28×36	23×30	26	楕円形	
185	〃	23	10	29	円形	
186	〃	21	14	36	〃	
187	〃	30	18	20	〃	
188	〃	16	9	推 27	〃	
189	〃	24	12	推 41	〃	
190	〃	23	13	28	〃	
191	F－4	22×30	12×18	13	楕円形	
192	〃	17	12	13	円形	
193	〃	38	28	8	不整円形	
194	〃	25	16	21	円形	

No.	グリッド	プラン 上場 cm	プラン 下場 cm	深さ cm	形状	備考
195	F－4	32×48	21×40(12)	27(40)	楕円形	2段おち
196	〃	17	11	13	円形	
197	〃	16	8	21	〃	
198	〃	25	18(7×11)	推36(46)	〃	2段おち
199	〃	15	10	推 32	〃	
200	〃	12×18	7×11	27	楕円形	
201	〃	24	12	49	円形	
202	〃	25	21(8×10)	6(10)	〃	2段おち
203	D－5	40	15×25	49	〃	Pit－08
204	〃	33	19	24	〃	
205	〃	27	18	9	〃	
206	〃	17	11	26	〃	
207	〃	16	7	13	〃	
208	〃	26	10×15	34	〃	
209	〃	20	11	13	〃	
210	〃	20	13	10	〃	
211	〃	30	22(6)	(32)	〃	Pit－11　2段おち
212	〃	46	25(8)	(40)	〃	Pit－07　2段おち
213	E－5	22	15	25	〃	
214	〃	15×23	13	33	楕円形	
215	〃	55	26	28	円形	SK－22
216	〃	33	25	20	〃	Pit－14
217	〃	18	12	9	〃	
218	〃	53	43		〃	Pit－12　No.248と切り合い
219	〃	32			〃	Pit－13　No.247と切り合い
220	〃	23	16	14	〃	
221	〃	18	10	8	〃	
222	〃	15	10	22	〃	
223	〃	23	16	11	〃	
224	〃	14×20	8	13	楕円形	
225	〃	22	13	25	円形	
226	〃	22	15	27	〃	
227	〃	22	13	21	〃	
228	〃	28×36	20×27	16	楕円形	
229	〃	22	12	26	円形	
230	F－5	26	11	15	〃	
231	〃	20×26	10×18	21	楕円形	
232	〃	23	13	40	円形	
233	〃	22	10	44	〃	
234	〃	30	16	28	〃	
235	〃	23	10	16	〃	
236	〃	20	13	23	〃	
237	〃	16	11	19	〃	
238	〃	21	12	21	〃	Pit－17
239	〃	16	10	30	〃	
240	〃	26	22(4)	18(26)	〃	2段おち
241	〃	18	12	11	〃	
242	〃	57	46	23	〃	
243	〃	21	11	20	〃	
244	D－6	17	7	8	〃	No.245と切り合い
245	〃	45	12	28	〃	
246	E－6	35	17	17	〃	
247	E－5	推26×40	15×32	28	楕円形	Pit－13
248	〃	16×28	8×13	16	〃	
249	F－7	27	8×13	13	円形	
250	〃	20	13	19	〃	
251	F－8	25	なし	7	円形	
252	〃	33×40	16×22	33	楕円形	
253	〃	21	13	31	円形	
254	〃	26	18	27	〃	
255	F－9	25	13	42	〃	
256	〃	22	13	10	〃	
257	〃	24×28	15	33	楕円形	
258	G－2	44	25(14)	29(37)	円形	Pit－20　2段おち
259	〃	20×30	11×19(5×14)	13(19)	楕円形	Pit－21　2段おち

No.	グリッド	プラン 上場 cm	プラン 下場 cm	深さ cm	形状	備考
260	G－2	20×24	13	18	楕円形	
261	〃	20×30	9×20	12	〃	
262	〃	22×26	14	27	〃	Pit－19
263	〃	20	12×14	15	〃	it－
264	〃	35	30(7)	22(31)	円形	19
265	〃	21	13(8)	10(20)	〃	2段おち
266	〃	26	15	29	〃	
267	G－3	18	10	25	〃	
268	F－3	25	15	推 25	〃	
269	G－3	22	14	推 18	〃	
270	〃	34	28(10)	7(23)	〃	2段おち
271	〃	24	13	22	〃	
272	〃	12×18	6	22	楕円形	
273	〃	15	5×10	14	不整円形	
274	〃	18×25	10×16	22	不整楕円形	
275	〃	15×20	10×13	11	〃	
276	〃	20	15	23	円形	
277	H－3	12×17	4×11	推 16	楕円形	
278	〃	21×27	16×22	推 39	〃	
279	〃	20×24	13	推 20	不整楕円形	
280	〃	23×29	16×21(6)	推18(29)	楕円形	2段おち
281	I－3	20	12	推 45	円形	
282	〃	推12×27	推6×17	推 36	楕円形	
283	〃	22	16(6)	22(43)	円形	2段おち
284	〃	22	11	36	〃	
285	G－4	20	15	23	〃	
286	〃	20	12	25	〃	Pit－27
287	〃	20	8	12	〃	
288	〃	21×26	14×19	推 32	方形	
289	〃	20	6(4)	推 23	円形	2段おち
290	〃	22	10	推 22	〃	
291	〃	25×25	17×17	推 25	方形	
292	〃	20×26	14	推 29	楕円形	
293	〃	22×35	15×22	推 22	方形	
294	H－4	15	6×10	推 20	円形	
295	〃	25×30	15×20	推 24	楕円形	Pit－23
296	〃	25	20	40	円形	
297	〃	25	18		〃	
298	I－4	22	16	推 29	〃	Pit－24
299	〃	25×28	18×19	推 47	方形	
300	〃	16×22	9×15		楕円形	
301	G－5	16×22	7×10	推 26	〃	
302	〃	10×14	5	推 22	〃	
303	〃	14	4	推 27	円形	
304	〃	18	11	推 24	〃	
305	H－5	22×30	15×18	推 33	楕円形	
306	I－5	33×46	26×38	推 27	〃	
307	G－7	18	6	42	円形	
308	〃	18	11	26	〃	
309	H－7	30×50	18×38	11	楕円形	
310	〃	16×25	10×22	8	〃	
311	I－7	44×44	32×32	6	不整方形	
312	〃	12×19	7	23	楕円形	
313	〃	20	15	16	円形	
314	G－8	33×43	14×30	12, 15	楕円形	底部段差あり
315	〃	25×31	16×21(3)	17(27)	〃	2段おち
316	〃	12×20	7×15	4	〃	
317	H－8	32	25(3)	15(18)	円形	2段おち
318	〃	24×31	20	29	楕円形	
319	〃	28	22	17	円形	
320	〃	19	14	17	〃	
321	〃	49×78	42×59	14	不整楕円形	
322	G－9	18	8	17	円形	
323	〃	15	8	7	〃	
324	〃	22	16(7)	15(25)	〃	2段おち

(3) 集石遺構 〔SXb－01〕(第6図)

グリッドG－9～H－9にかけて検出された。集石に使われた石は、大小さまざまの丸石がほとんどである。石は長軸240㎝、短軸140㎝の範囲内に入り組んだ状態で並らべられている。集石の下部には、長軸160㎝、短軸140㎝の隅丸方形を呈する土壙が構築されている。底部はほぼ水平レベルで、石は底部にくい込んではいない。おそらく地面を掘り凹めた中に石を組む形で構築したものと思われる。また、遺構に直接的に結びつくと思われる遺物はなく、時期、性格については不明である。

(4) 溝状遺構 〔ＳＤ－22〕(第10図)

発掘時において、本址は後述するうね状遺構と同種のものとしてとらえたが、遺構幅、深さ等がそれらと異なるため、溝状遺構とすることとした。本址はグリッドＩ－８～９にかけて検出された。方位はＮ－30°－Ｅにとる。上場幅は最長135㎝、最短100㎝を計るものの、ほぼ平行に掘り込まれている。また、底部は北から南方向にかけてほとんど同一レベルで構築されている。本址南側は、遺構検出面との差があまりみられず途中において検出できなかった。

遺構内出土の遺物は、縄文土器片、弥生土器片、土師器片、土師質土器片が混在し、直接的に時期を比定できる遺物はなかった。

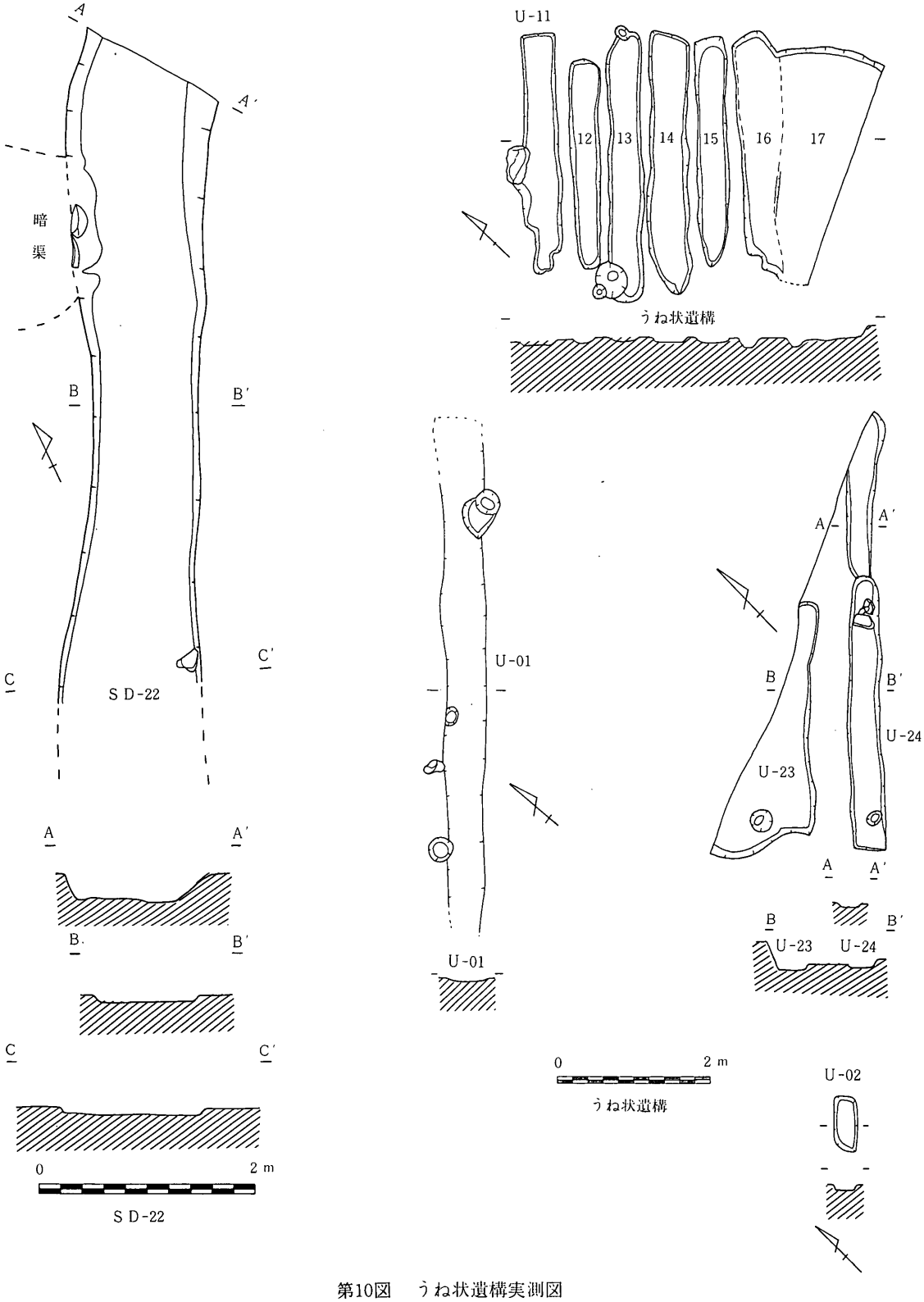
(5) その他の遺構

① うね状遺構 〔Ｕ－10～21〕(第10図、第11図)

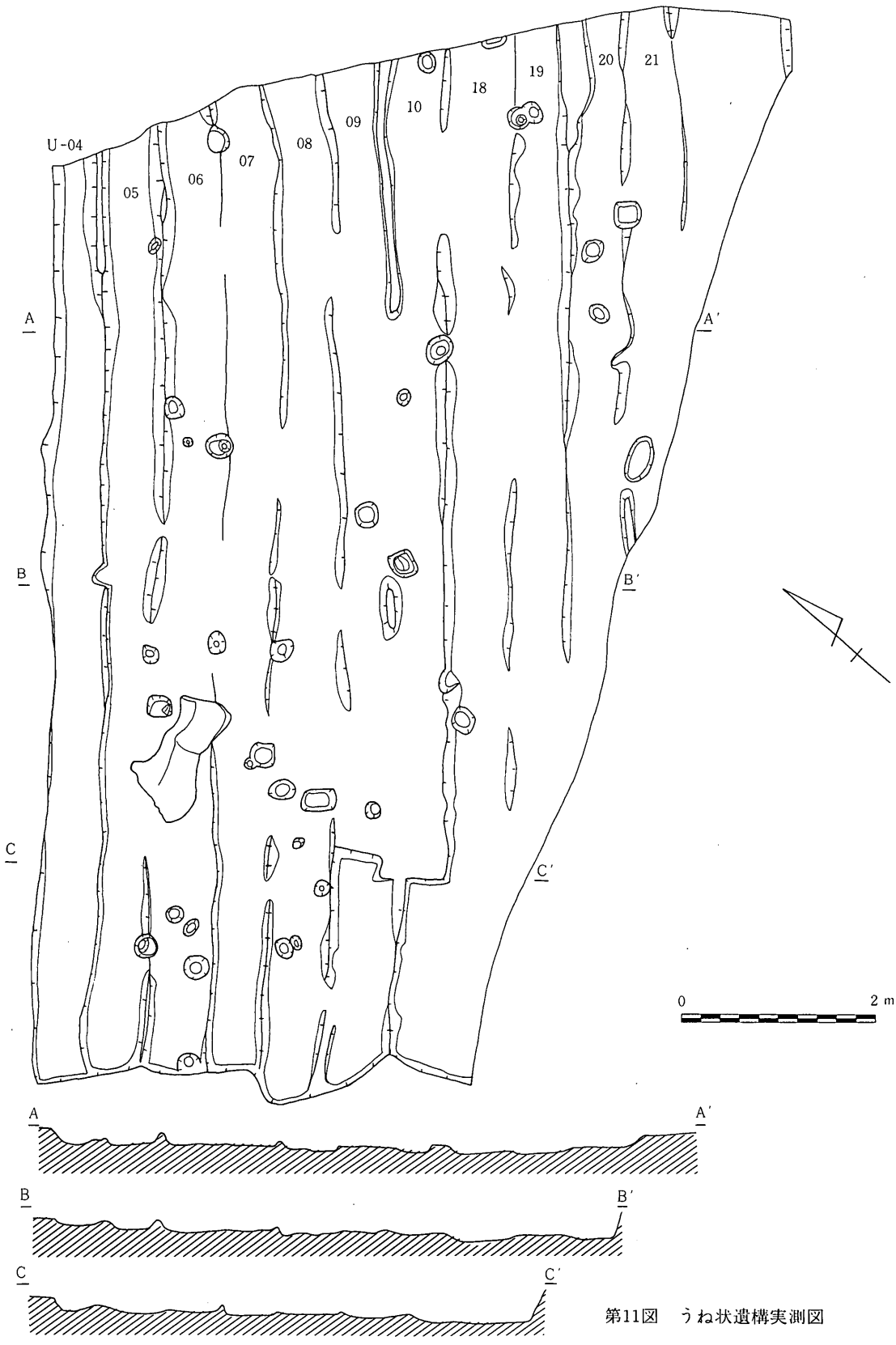
うね状遺構は調査区域西側部分において、その大半が検出され東側部分に２基みられた。遺構はまとまりをみせている。それぞれの幅は50㎝内外の大きさをもち、隣接する遺構とわずか離れて構築されるのが基本的形と思われる。底部はほぼ平らで、北から南にかけわずかながらの傾斜をみせる。方位はいずれもＮ－45°－Ｅをとる。出土遺物は、縄文期から中世に至るまでの土器が混在し、まとまりはない。詳細な時期は不明である。いずれにしても、本址は時期的にはほぼ同時期に構築された、農業耕作址としてとらえることができよう。

② 列石遺構 〔ＳＸ－01〕(発掘区全体図参照)

調査区域東側の部分のグリッドＦ－８、Ｆ－９、Ｅ－10にかけて検出された。長さは北東から南西にかけ約８ｍに及んでいる。本址は西側と東側の畑の境界付近に構築されており、土地の境石と思われ、現代のものとしてとらえた。



第10図　うね状遺構実測図



第11図　うね状遺構実測図

3、出土した遺物

(1) 縄文時代の遺物

① 縄文式土器（第12図～第16図）

本遺跡出土の縄文式土器は、量的には大きな比重を占めてはいるものの、ほとんどが小破片である。それ故、明確な時期区分を行なうことは難かしく、特に縄文のみが施されている土器などはそれだけでは極めて難かしいことである。土器の出土状況もいわゆるセットとしてとらえることができなかったために、共存関係等によって時期をとらえることもできなかった。よって分類においては、主体的に施される文様によることとし、さらに施文手法、胎土、成形等も加味しながら、大きく６群に分類し説明を加えることとする。文様による分類のため時期を異とするものが混在していることを予め明記しておきたい。また各群においても、施文手法、成形等によりグループ化できるものは、その都度説明を加えることとする。また遺構内出土のものは、量的にはそれ程多くはないのでグリッド出土土器とあわせて分類した。遺構内出土土器はその都度記することとしたい。

第１群の土器　（第12図１～28　第13図29～33）

集合する条線の施される土器を一括することとする。

まず28は出土した縄文式土器の中でも比較的良く接合したものである。Ｐｉｔ－05内出土である。底部直径約66㎜を計り、底部からゆるやかに外反する器形となる。胎土には黒雲母、極細砂粒を含みやや器面がざらつく。色調は淡赤褐色を呈する。施文は７条前後の沈線が集合し、胴部は左右に斜行する事により菱形状を作り出している。底部直上には、一部とぎれはするが５～６条の横位に巡る集合する条線がみられる。この土器とほぼ同種の施文の行なわれているのが、１～25までである。これらの土器は28と同種の胎土をもつが、器面は比較的滑らかなものが多い。色調は灰色がかった淡赤褐色と淡赤褐色のものとがみられる。施文は横位に巡る集合条線を主とするもの（１ほか）、斜行する集合条線を主とするもの（22）、またはその両者の併用されるもの（６）、曲線的な集合条線の施されるもの（23）などがある。これらの施文は28にみられる様に、１個体の中において斜行する条線と横位に巡る条線とが併用されるのが一般的であろうかと思われる。また、集合する条線が全面に施されるのでなく、間隔を保って施されると思われるもの（２ほか）また条線のない部分に縄文の施されるもの（15）などもある。４、13はＰｉｔ－22、18はＳＫ－15、23はＳＫ－11内の出土である。

次に、26、27は前記とやや様相を異にするものである。ともに条線がやや間隔を保って施文されている。また斜行する条線が交錯している。26はＳＫ－09内出土であり、胎土、色調、器厚などは前記の土器群に類似している。27は器厚10㎜前後を計り、前記の土器群よりも厚い。施文はかなり力強く、深い沈線であり、その沈線が平行に施されていない部分がみられる。29～33も前

記の土器群（１～25）とはやや様相を異とする一群である。これらは胎土に黒雲母、細砂粒を多く含むものの焼成よく堅緻な土器である。器厚はおおよそ10㎜前後を計り、色調は淡赤褐色を呈する。29、30は４～６条の沈線が１単位をなして斜行する形で施される。沈線の施文は、あまり力強くなく不明瞭な部分もみられる。以上２片は同一個体かと思われる。31は口縁部破片である。口縁部直下からほぼ等間隔をもって、横位に巡る沈線が施される。32、33は胴部破片であるが、ともに斜行する沈線が施されている。

第２群の土器（第13図34～57）

沈線文の施される土器を一括することとする。

本群に含まれる土器は沈線がその主要施文となるが、それぞれに同一性はあまりみられない。34は沈線によって区画された内側に、左右に斜行する沈線が交錯している。胎土に金雲母を多量に含み、暗褐色を呈する。35は口縁部破片である。口縁部の一部が山形に隆起し、その部分が肥厚している。おそらく楕円状の沈線とその内側に斜行する沈線が施されると思われるが、全体の文様構成は不明である。胎土に金雲母、黒雲母、石英粒、細石粒を多く含み粗い。色調は暗褐色を呈する。37は沈線による区画をもち、その内側に垂下する沈線と間隔を保って隆帯をもつ。胎土に金雲母を多量に含み、暗赤褐色を呈する。38は口縁部破片であり、口唇部が山形に隆起する。その直下に円形刺突文をもつ。胎土に黒雲母をわずかに含み、焼成よく堅緻な土器である。39～51はほとんどが横位に巡る数条の沈線が施されるものである。41、43は斜行する沈線文の施されるものである。これらの土器は、胎土、色調、施文手法等にほとんど共通性はみとめられない。52は垂下する直線と斜行する沈線の組み合わせによる文様構成をとると思われる。53は底部破片であり、底部直上に数条の沈線が巡らされている。55は左に斜行するやや長めの沈線と、その間を結ぶように右に斜行する短かめの沈線とによって文様を構成している。56、57は胎土に細石粒を多く含み赤褐色を呈するが、胎土、色調とも酷似しており同一個体かもしれない。
41はＳＫ－27、49はＳＫ－15、51はＳＫ－26内の出土である。

第３群の土器（第14図58～82）

刻み目文あるいは刺突文の施される土器を一括することとする。

本群の土器の大まかな共通点は、２条ないし数条の沈線が施され、その間に半截竹管の使用されたと思われる爪形の刺突、円形の刺突、あるいは直線的な刻み目の施されるものがある。量的には爪形の刺突の施されるものが主体を占めている。また沈線の施文は、曲線的に施されるもの、直線的に横位に施されるもの、あるいは斜行するもの等がみられる。またこれらの土器は、一概には言えないものの、胎土に細石粒を多く含んでおり、器面の粗いものが多くみられる。色調は赤褐色、淡赤褐色、暗赤褐色を呈するなどさまざまである。以下に特徴的なものをみることとする。58は口縁部破片であり、口唇部には蛇行する隆帯が施されている。施文は２個１対と思われ

る竹管使用の円形刺突と曲線的な沈線間に施された刺突とがみられる。62は上下平行に半円の2条の刺突が並んでいる。この種が最も多い。68は口縁部破片である。横位に巡る刺突文と斜行する刺突文とが併用されている。81はこの1点のみ他と異なり、刺突が連続せずに間隔を保って施されていると思われる。刺突の施される部分を予め隆起させ、そのほぼ中心部に円形刺突が施されている。82は底部破片である。底部直上に2条の刻み目文の列が平行して施されている。2条の刻み目は上が右下がり、下が左下がりと異なっている。
60はＳＫ－05、69はＳＫ－21、76はＳＫ－27内の出土である。

第4群の土器（第14図83～87　第15図88～99）

隆帯文の施される土器を一括することとする。

本群の土器は大きく2つに大別することができ、その1つは比較的良好な胎土をもち、また細い隆帯文の施されているもの（第14図83～87　第15図88～95）と、もう1つは胎土が粗く太い隆帯文の施されているもの（第15図96～99）とがある。

前者についてみていくと、83は口縁部片であり、2条平行する隆帯とそれを上下に結ぶように隆帯が施され、その隆帯上に斜めに刻み目文が施されている。85は斜行する隆帯が3条みられる。87は口縁部破片である。口縁部から頸部にかけて外反し、頸部から「く」の字形に屈曲する。その頸部に隆帯が施され、一部上下2条に分かれている。また口縁部に1個の穿孔がみられる。この土器は胎土、成形が非常に精練され、頸部には朱塗りがみられる。器形、成形等から特殊な機能を有していたことが推定される。90は地文にわずかながらも縄文が認められる。
84はＳＸb－02、88はＳＫ－13、92はＳＫ－29、94はＰｉｔ－25内の出土である。

次に太い隆帯をもつものである。これに含まれるのは4点のみである。96、97、98は太い隆帯上に、おそらく指頭圧痕と思われる刺突が施されている。また99は口縁部の外側が隆起し、その下側が三角形状に削りとられている。さらにその下には3条の沈線がみられる。施文手法は前記3点と異なるものの、おそらく同種の土器と思われる。これらの土器は胎土に黒雲母、石英粒、細石粒を多く含み、器面が非常に粗い。

第5群の土器（第15図100～108）

精製土器・注口土器・口縁部突起を一括することとする。

本群は胎土の比較的精練された黒色研磨の精製土器および注口土器、口縁部突起をまとめたが、第1群～第4群および第6群については、その主体的な施文手法を分類基準とした点と矛盾するが、本群の土器はほぼ時期を同じくするものであり、また出土数も少なかったため、本群に一括したことを予め明記したい。

100～103は深鉢の精製土器である。これらはいずれも横位に巡る沈線をもち、その間を結ぶように斜めに短かい沈線が施されている。100は口縁部破片であり、口唇部には刻み目文を有す

る。また口縁部内側は断面山形に肥厚する。本例および101は口縁部からゆるやかに内彎する器形をとると思われる。102はＳＫ－05　103はＳＫ－21内の出土である。

次に104～106は注口土器の胴部片である。いずれも平行する数条の細い沈線を有している。106は深鉢でみられたような施文も併用されている。いずれも器厚4 ㎜程度で薄く、胎土にはやや細石粒を含み粗い。色調は暗灰色を呈する。107は注口土器の注口部であるが、本点1点のみの出土である。施文は全く行なわれていない。胎土には細石粒を多く含み粗い。色調は淡赤褐色を呈する。108は口縁部突起であり、本点1点のみの出土である。胎土、成形は非常に良好である。

第6群の土器（第15図109～115　第16図116～138）

縄文を主文様とする土器を一括することとする。

縄文を主文様とする土器については、時期的な幅があると考えられるが、時期的にも、機能・形態等についても、類似性があると思われる場合には、その都度説明を加えることとする。

109、110は胎土に繊維を含む土器である。109は施文が乱雑であり不明瞭であるが、ＬＲ縄文とＲＬ縄文とがみられる。以上2点は胎土に石英粒、黒雲母をやや多く含み、暗褐色を呈する。111～114は胎土に繊維は含んでいないものの、胎土、色調等は前記2点に似る。施文はＲＬ縄文を主体とし、羽状構成はとらないらしい。また112には穿孔がみられる。これらは成形がていねいで、内面はなで成形がなされており滑らかである。第60図 116～122は縄文が羽状構成をとるものである。羽状構成が整ったものと不明瞭なものとがある。

116は施文がていねいに行なわれているものである。ＬＲ縄文とＲＬ縄文とが結束されて羽状構成をとる部分もみられるが、結束のない部分もあるらしい。胎土には黒雲母、細石粒を含むものの焼成よく堅緻な土器である。色調は暗灰色を呈する。117も116と同様の文様構成をもち、胎土、色調等も類似し、ともに器厚5 ㎜強を計る。同一個体かもしれない。118は比較的太い縄文原体により羽状構成をとる。器厚12㎜を計り、同種の中では厚い。胎土、焼成はよく非常に堅緻な土器である。色調は暗赤褐色を呈する。121は2種の縄文原体が非常に粗雑に施されており、明瞭な羽状構成をとっていない。123～128は無節縄文の施される一群である。123は断続的に横位に巡る沈線が施され、その間に縄文が施される。124と127は2本の縄文原体を結束して羽状構成をとるらしいが、施文が弱くやや不明瞭である。また、129は縄文原体を結節し回転施文がなされているが、縄文施文が弱く一部にのみ縄文が認められる。130～134は口縁部片、底部片または施文に特徴のある土器を図示した。130、131は口縁部片である。130は施文がやや不明瞭ながら、ＬＲ縄文が施され、131は力強くＲＬ縄文が施されている。132は底部直上である。縄文施文はやや条の整わない部分がみられ、無文部分が残されている。133は楕円状の沈線区画と2条の垂下する沈線がみられ、地文にはＲＬ縄文が施されている。134は2条の平行沈線がほぼ横位に巡るものと、斜行するものとがみられる。地文にはＲＬ縄文とＬＲ縄文の2種がみられ

る。135～138は比較的大きな胴部破片である。いずれも器厚が10mm～15mmを計り、大型の土器と思われる。また胎土も石英粒、黒雲母、細石粒を多量に含み粗い土器である。器面がざらついているためか、施文の一部が不明瞭となるところがある。色調は135、136が淡赤褐色、137、138が赤褐色を呈する。

119はＰｉｔ－05、125はＳＫ－05、132はＳＫ－27内の出土である。

以上本遺跡出土の縄文式土器について説明を加えてきたが、小破片が多く時期区分においても不明瞭な点が多々みられた。また出土状況も広範囲に亘っており、特徴をとらえることも困難である。しかしながら、第１群に分類したもののうち多くは、繊細な集合条線をもち、前期後半期に位置する、諸磯系土器の特徴をよく表わしており、量的にも多く良好な資料と言えよう。

次に第３群に分類した爪形文、刺突文については、いずれも小破片が多くその全容を知ることはできないが、かなりまとまりをもっており第１群土器との関連も考慮に入れ注意しておきたい。第５群に分類した後期の土器も出土数は少ないながらも良好な土器がみられた。また後期において特徴的となる、精製土器と粗製土器の関係では、無文粗製土器はほとんどみられなかったものの、第４群とした隆帯文を有する土器群の中にはやや胎土の粗い粗製土器的なものも含まれており、両者の関連性についても考慮しておきたい。次に第６群とした縄文を主体とする土器群については、わずかながらも前期特有の繊維を含む土器もあり、また縄文施文に特徴をもつものも多く良好な資料と言えよう。　（西沢　浩）

②　石　器（第17図～第20図）

舞台遺跡では、縄文時代に属すると思われる石器が382点出土した。そのほとんどが、石鏃・石錐などを製作する際に出るフレイク・チップ類で、全体の７割強を占めている。また、図示し得なかった石器の中にも興味深い石器がいくつかある。本来ならば、当然上記の石器も含めて、総合的に分析を行なわなければならないのであるが、ここではあえて図示した30点の分析のみを試みることとする。

尖頭器（第17図１）

尖頭器の基部破片が１点出土している。丁寧な押圧剥離が施されており、縄文時代の一般的な尖頭器とは異質である。また、基部のみの小片であるため、多少無理はあるが、推定全長は少なくとも８～10cm程はあるものと思われる。以上のことから、この尖頭器は、旧石器時代終末期から縄文時代草創期にかけて製作・使用された神子柴型尖頭器であると考えられる。地形的にも、この種の石器が出土している他の遺跡と共通点が多く、何ら問題はないとのことである（森嶋稔氏の御教示による）。かつて出場・上の原遺跡において、同様な石器が１点採集されており、東部町内で２例目であり、発掘調査によって出土した遺物の中では、最も古い段階に位置づけられる。

石鏃（第17図２～11）

10点図示した。２～９は無茎石鏃で、いずれも黒曜石製である。有茎石鏃である10は頁岩製・11はチャート製である。無茎・有茎の違いによって石材の選択がなされるのではなく、時代差で茎の有無（形態）が規定され、それに付随して石材の選択がなされるのであろう。

２～４は、極めて小形の石鏃である。重さも0.2～0.4ｇと軽量で、特に２は本当にアローヘッドとして機能したのか疑問を感じる。２・３の抉りは、比較的深いのに対し、４は明瞭ではなく、平基に近い。５～７は、幅広で両側縁が弧を描いており、前期によく現われる形態である。なお、５は薄い剥片を素材として、縁辺のみを調整した無茎平基石鏃である。８は、先端が左側に曲がった不格好な石鏃である。９は、基部を欠くが、無茎であったように思われる。加工は丁寧で、薄く仕上げられている。10は、均整のとれた有茎石鏃である。後期に属すると思われる。11は、大形有茎石鏃である。調整は数多く施されているが、やや雑な印象を受ける。本例もやはり後期に属するものであろう。

ピエス・エスキーユ（第18図12～16）

対峙する縁辺に連続的な打撃痕が残されているものを一括した。５点とも黒曜石製である。

12は、断面が紡錘形を呈する典型的なピエス・エスキーユである。『つぶれ』は、上が線状であるのに対し、下は５㎜四方の面全体である。13は、小形ではあるが、剥離がかなり進行した好例である。『つぶれ』は上下共線状である。14・15・16は、縦長の素材を用いており、断面は紡錘形を呈していない。『つぶれ』の範囲・剥離の数ともにあまり顕著ではない。なお、16の左側縁には、著しい刃こぼれが看取された。

石錐（第18図17～20）

17～19の３点は、つまみ部を意識的に作り出している。いずれも錐部断面は円形に近く、錐部先端を欠く19以外は、先端から１㎝以内の箇所に使用痕が認められる。20は、錐部の作出を二方向から行なっており、断面は三角形に近い。つまみ部は、錐部を作出することによって、結果的に生じたようなあり方を示す。雑な作りの完全品なのか、未製品であるのか不明である。

石核状石器（第18図21）

１点のみの出土である。二枚剥離面打面で、前回のみで剥離を行なっている。打面角は約70度をなしている。剥離面長は最大でも２㎝で、この石核から得られた剥片は５㎜乃至は１㎝前後の小片である。このことから、石核とはせずにあえて石核状石器としたのである。

剥片（第18図22）

最初に記したとおり、出土石器の大半が剥片類であるが、その１割弱に使用痕・加工痕が認め

られた。22はその好例で、裏面下部に加工痕・正面右側縁全体に使用痕が認められる。

打製石斧（第19図23・24）

小片を含めて6点出土しているが、そのうち最も遺存状態が良好な2点を図示した。23は、斧頭部破片であるが、短冊形を呈するものと思われる。正面に大きく自然面を残している。24は、小形で短冊形を呈する。正面刃部付近に磨耗痕が認められる。

敲石（第19図25・26）

25は、凹石を転用したもので、上下・左側縁に敲打痕が認められる。26は上下に敲打痕が認められる。磨石としても使用されたようである。

磨石（第19図27・28、第20図29）

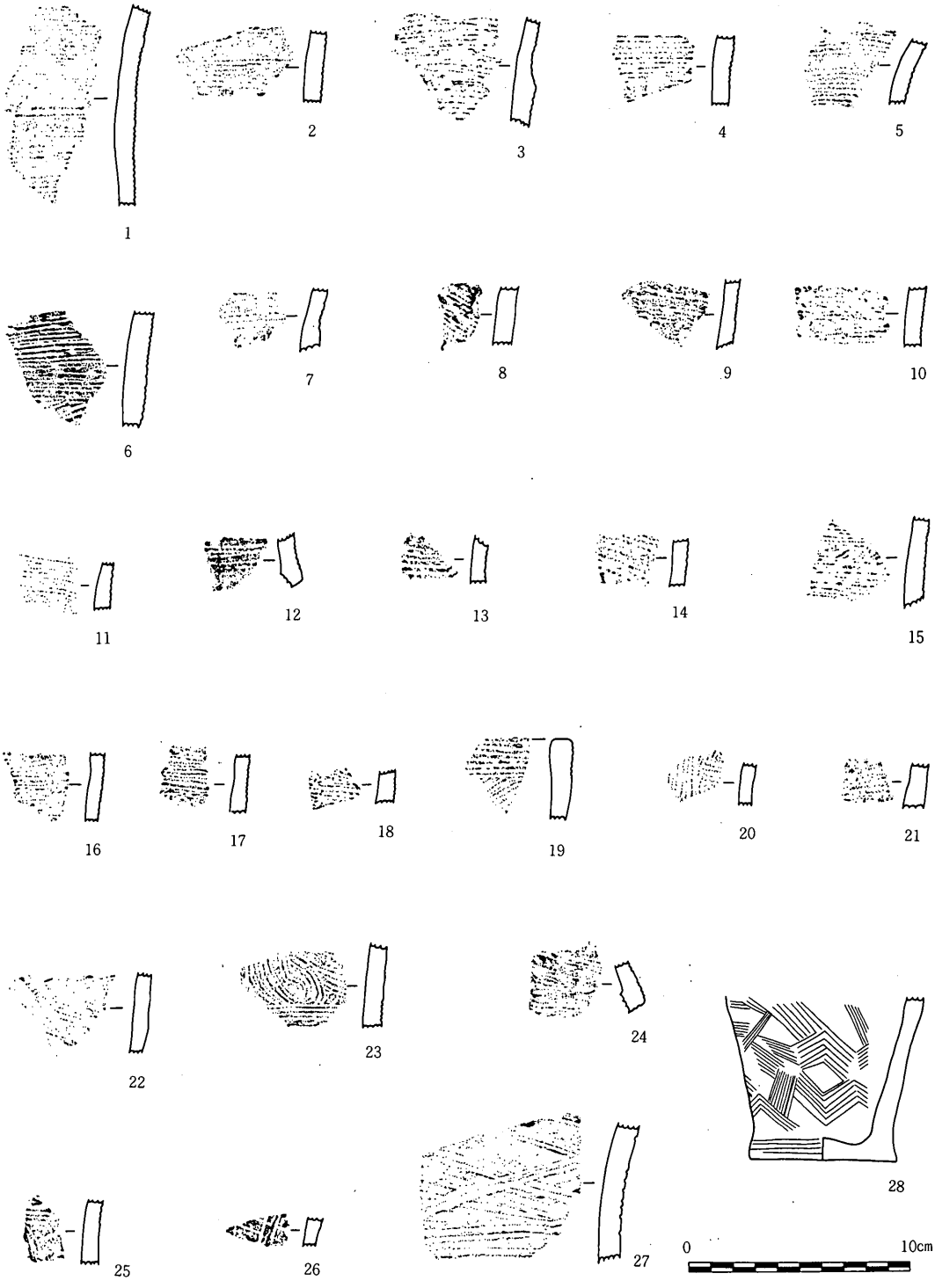
27・28は、大形で細長い礫を、29はやや小ぶりの礫を用いている。3点とも正裏両面に著しい磨耗痕が認められる。

石錘（第20図30）

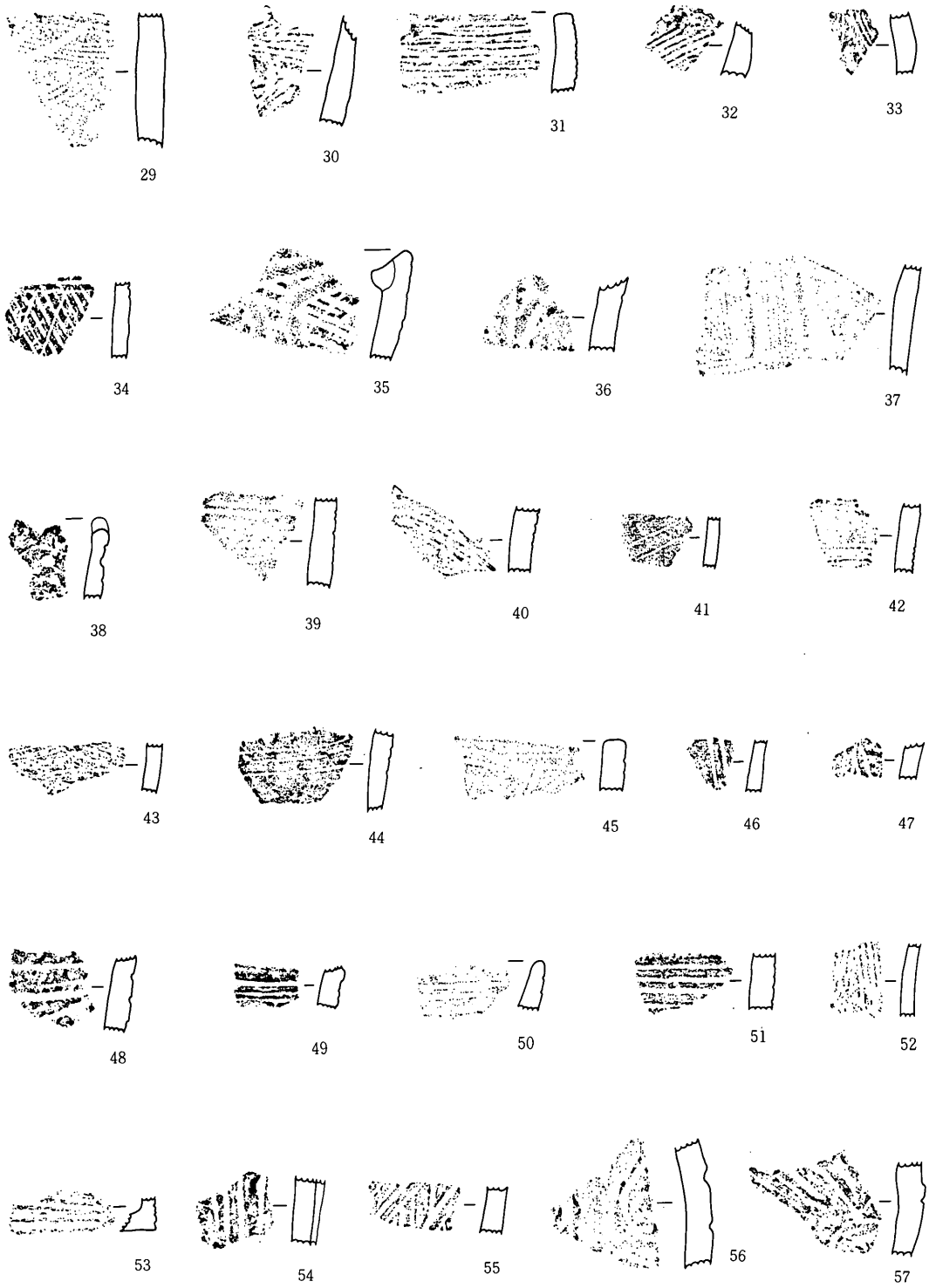
上部に数回に及ぶ打ち欠きがあり、下部に二箇所磨耗による凹みが作出されている。都合三箇所の紐掛けがあり、特異な形態の石錘である。（堀田雄二）

③ 土製円板（第20図35）

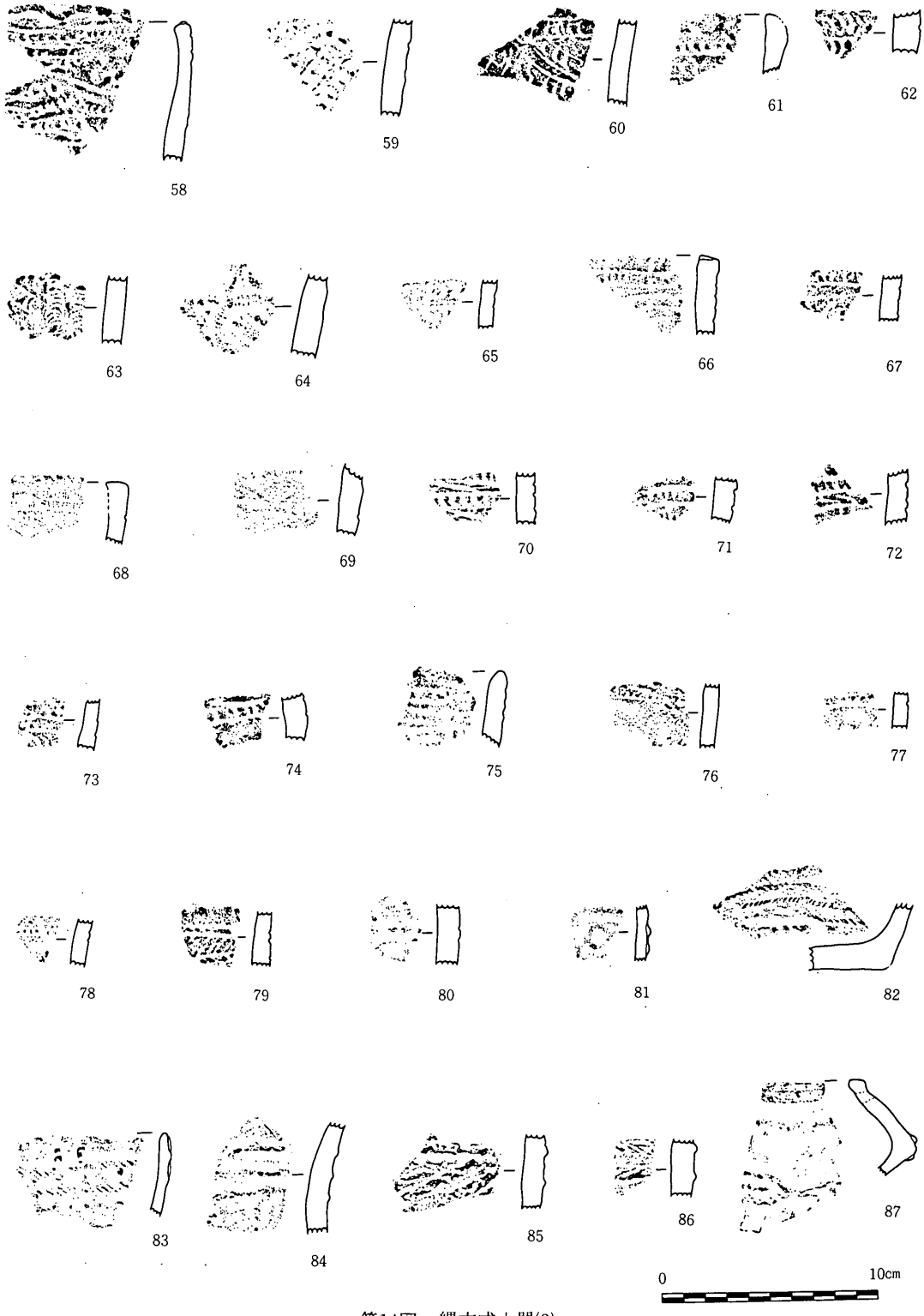
本遺跡においては、唯一点の出土である。内面に2条の平行沈線がみられ、外面は無文となる。側面はやや粗雑ながら、研磨した痕がみられる。胎土には黒雲母を多量に含み器面は粗い。色調は暗赤褐色を呈する。（西沢　浩）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

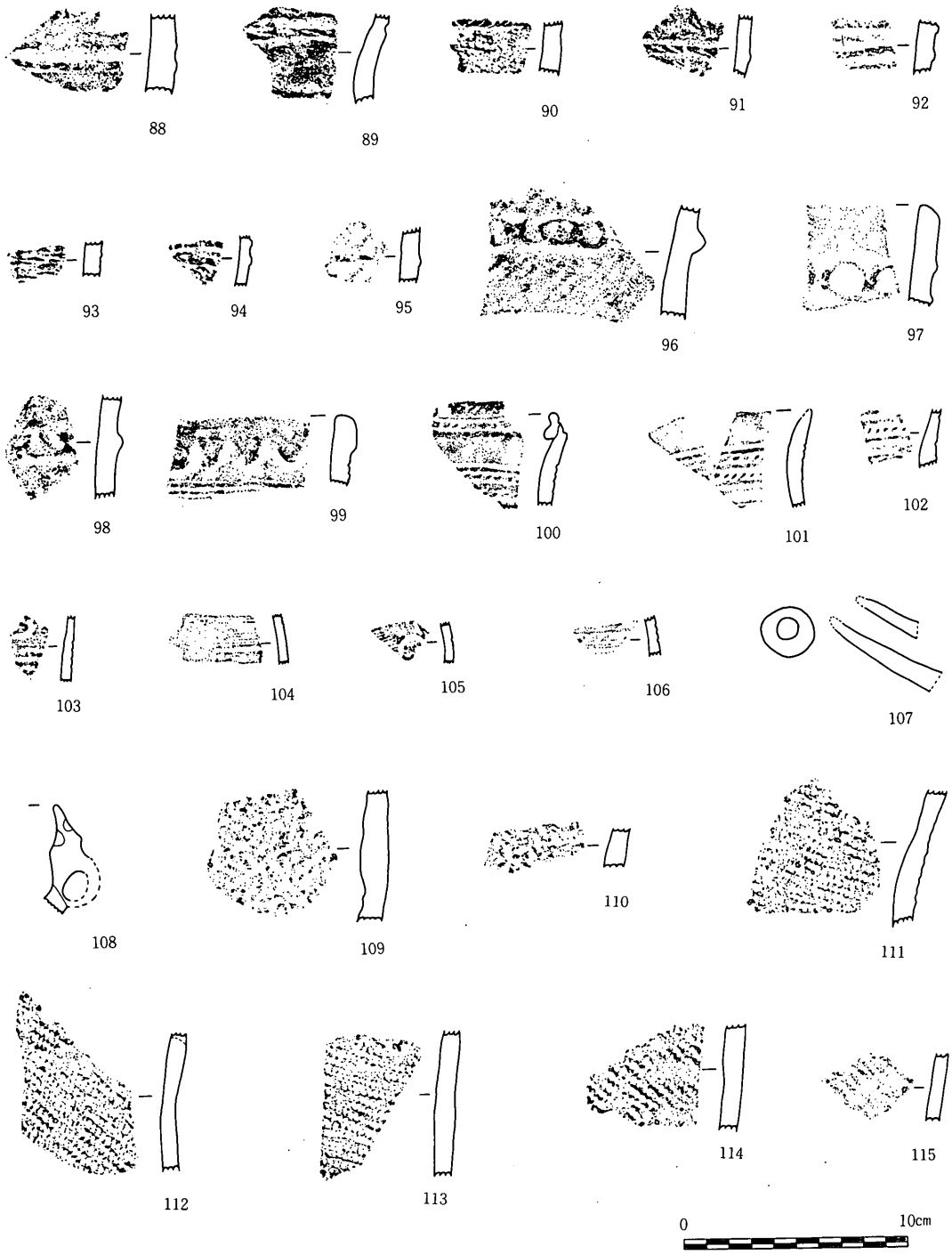
第12図　縄文式土器(1)


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
0
10cm

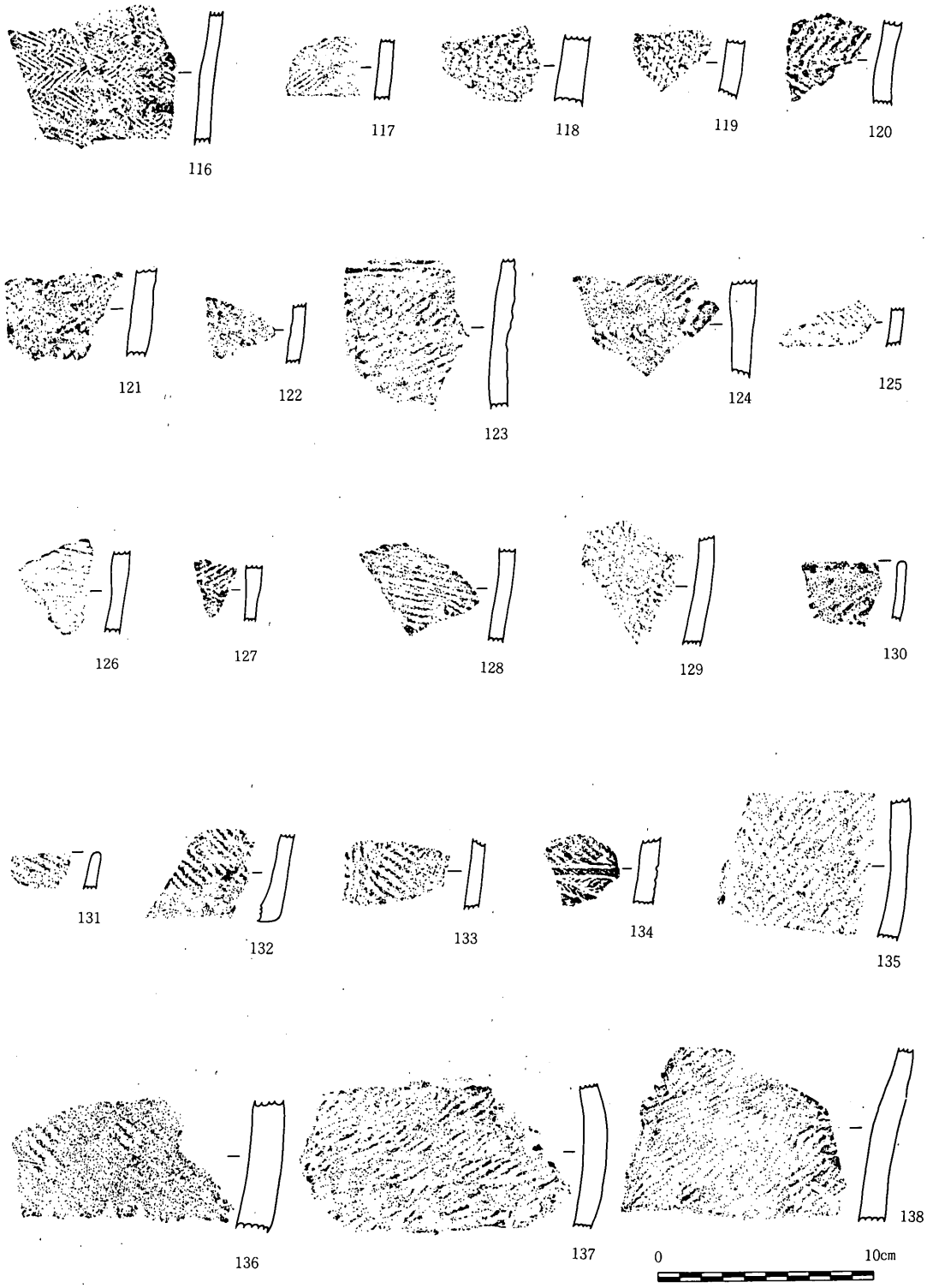
第13図　縄文式土器(2)


58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
0
10cm

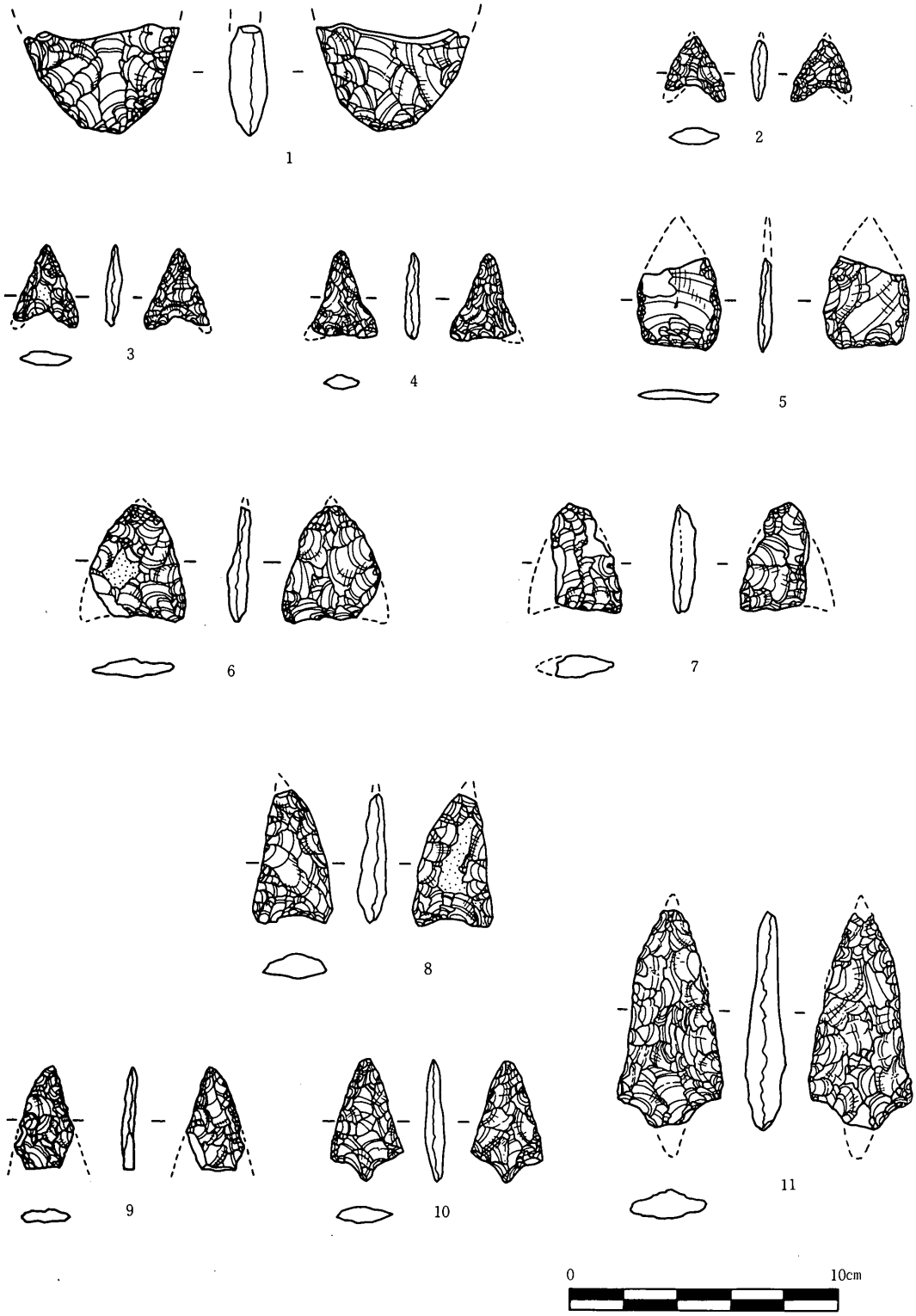
第14図　縄文式土器(3)


88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
0
10cm

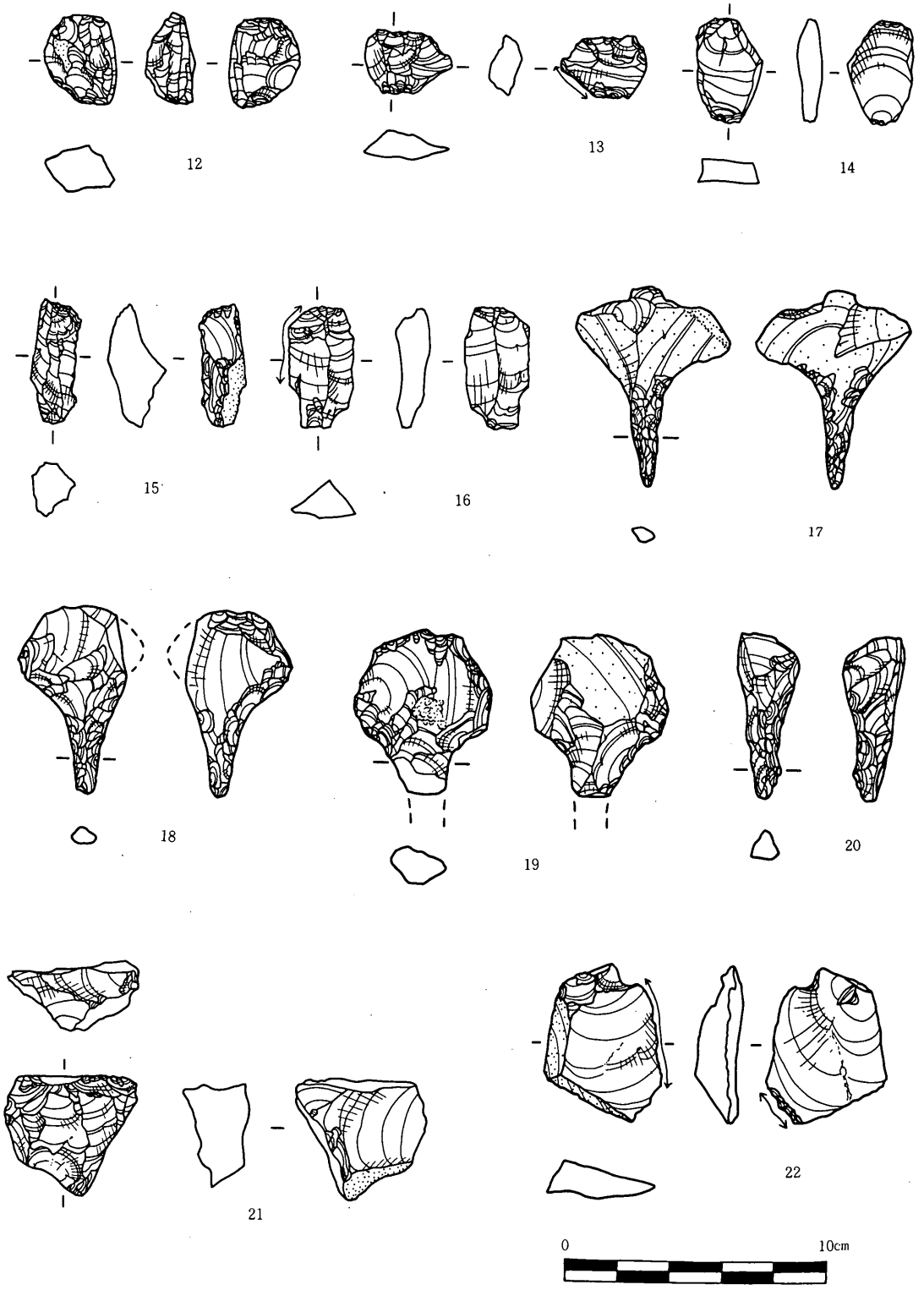
第15図　縄文式土器(4)


116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
0
10cm

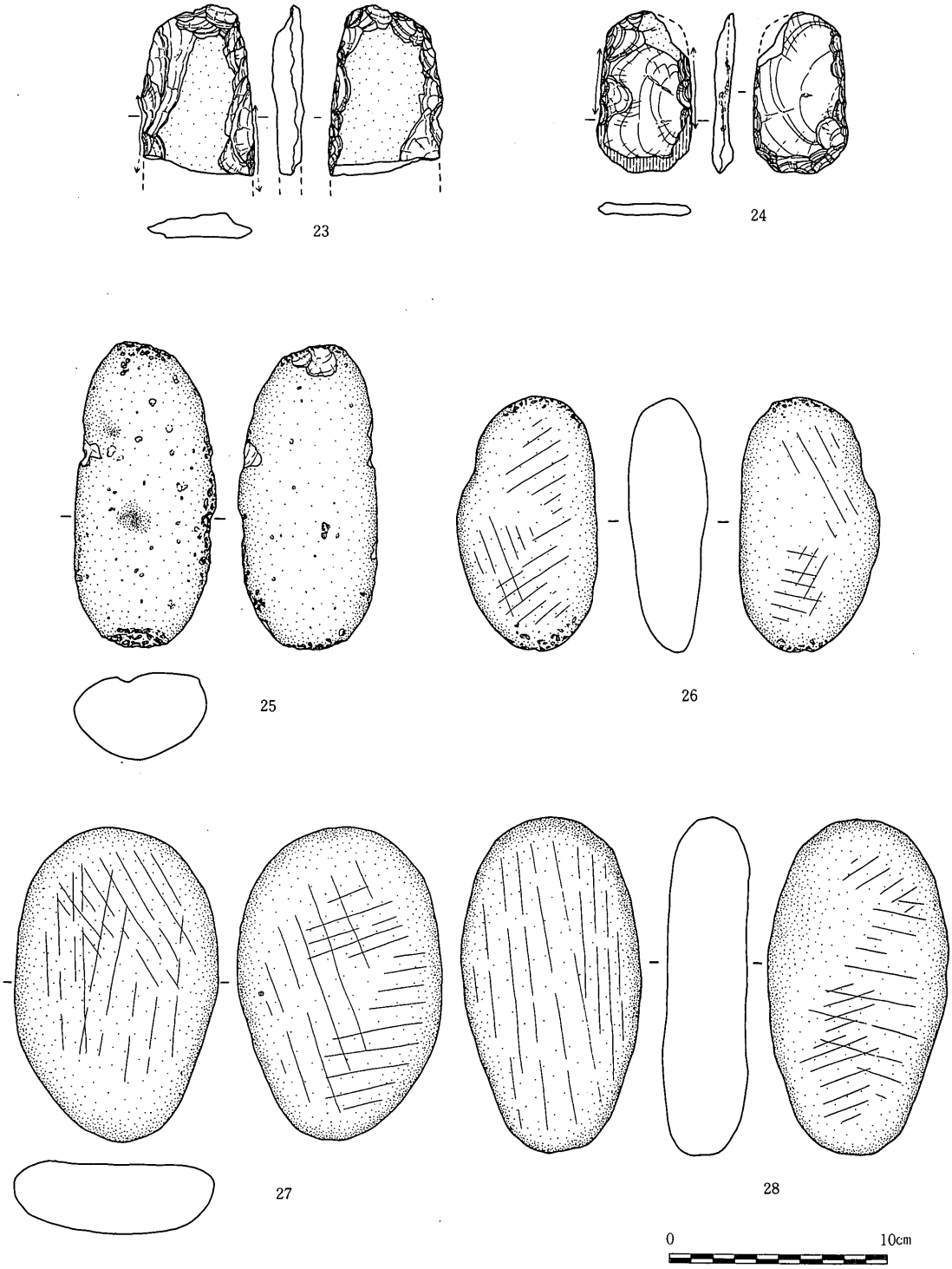
第16図　縄文式土器(5)



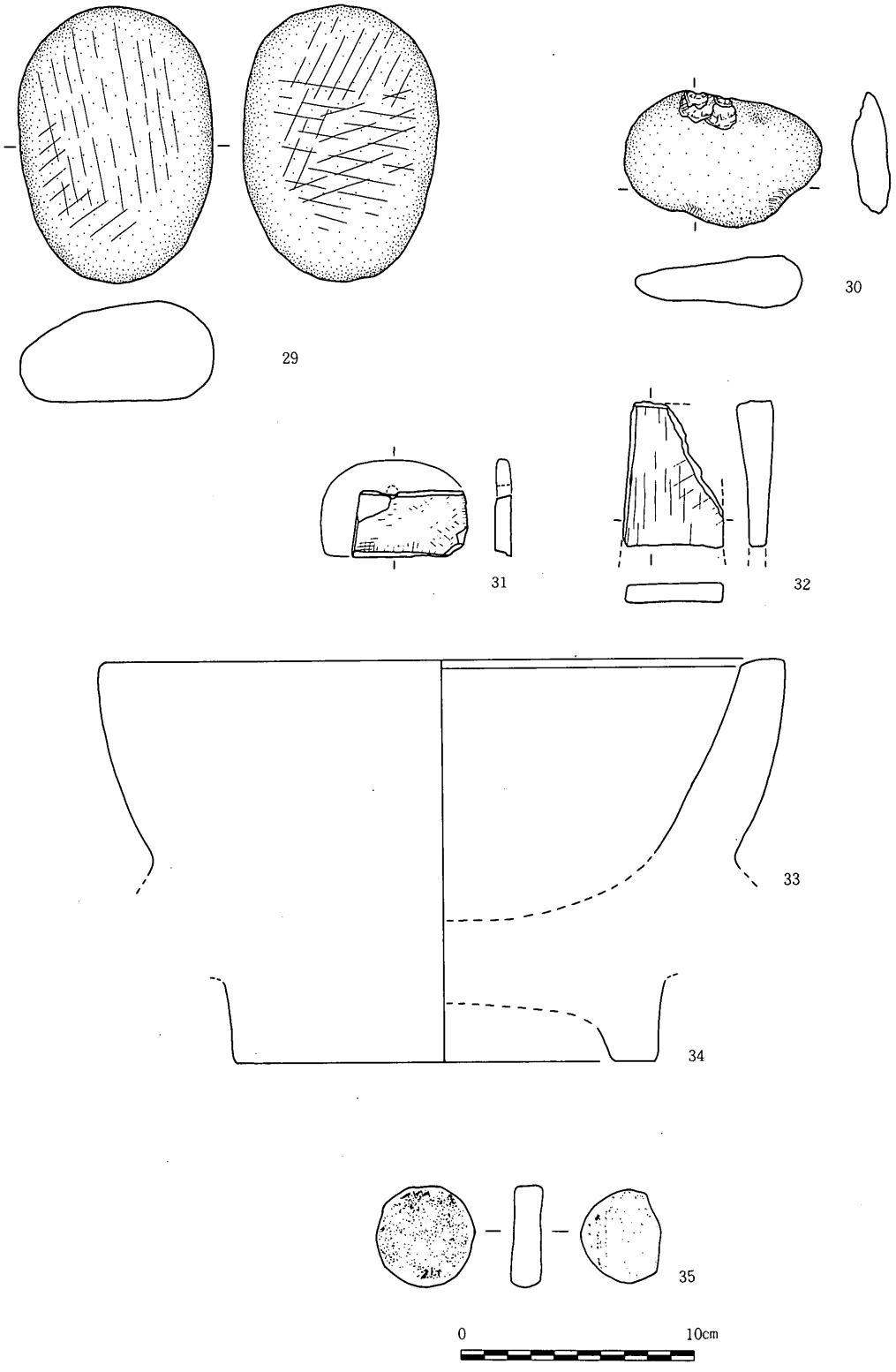
第17図　石器実測図(1)



第18図　石器実測図(2)



第19図　石器実測図(3)



第20図　石器実測図(4)・土製円板

第2表　舞台遺跡出土石器観察表

単位はcmおよびg
( )内数値は現存値

No.	器　種	出土地点	石　材	長　さ	幅	厚さ	重量	残存状態	備　考
1	尖頭器	D－8	黒曜石	(2.0)	(2.9)	0.7	3.7	基部のみ	
2	石　鏃	D－7	〃	1.5	1.2	0.3	0.3	片脚部欠損	正面一部に自然面
3	〃	G－7	〃	(1.2)	(1.15)	0.3	0.2	先端部・片脚部欠損	
4	〃	SK－03	〃	1.65	(1.25)	0.3	0.4	片脚部欠損	
5	〃	F－5	〃	(1.7)	1.6	0.25	0.7	先端部欠損	
6	〃	Pit－28	〃	(2.2)	1.8	0.45	1.1	先端部・片脚部欠損	正面一部に自然面
7	〃	Pit－13	〃	2.05	(1.3)	0.5	1.0	片側縁・片脚部欠損	未製品か
8	〃	H－8	〃	(2.5)	1.55	0.55	1.8	先端部・片側部欠損	裏面一部に自然面
9	〃	SD－09	〃	(1.9)	(1.1)	0.3	0.4	基部欠損	
10	〃	F－4	頁　岩	2.3	1.4	0.45	0.8	完　形	
11	〃	SD－22	チャート	(4.2)	2.0	0.8	5.0	先端部・茎欠損	
12	ピエス・エスキーユ	SK－13	黒曜石	1.7	1.4	0.9	2.3	完　形	正面一部に節理面
13	〃	SK－27	〃	1.2	1.7	0.7	1.0	〃	
14	〃	SD－22	〃	2.0	1.3	0.5	1.6	〃	
15	〃	〃	〃	2.4	0.9	1.2	2.0	〃	裏面一部に自然面
16	〃	Pit－13	〃	2.3	1.25	0.7	2.0	〃	使用痕あり
17	石　錐	B－3	〃	3.8	2.95	1.2	4.7	〃	両面一部に節理面
18	〃	I－10	チャート	3.55	(2.1)	1.1	4.0	つまみ部一部欠損	
19	〃	H－10	黒曜石	(3.1)	2.6	0.9	5.8	錐部欠損	裏面一部に節理面
20	〃	G－8	〃	3.15	1.2	1.2	3.3	完　形	
21	石核状石器	Pit－28	〃	2.3	2.6	1.35	7.0	〃	裏面一部に節理面
22	剥　片	SK－05	〃	3.0	2.3	0.9	3.7	〃	加工痕・使用痕あり。正面一部に節理面
23	打製石斧	D－9		(7.7)	(5.2)	1.5	63	刃部欠損	両面一部に自然面
24	〃	H－7		7.3	4.4	1.0	29	斧頭部欠損	正面一部に自然面。刃部に磨耗痕。
25	敲　石	F－2		13.8	6.5	4.4	460	完　形	凹石を転用
26	〃	SK－12		11.5	6.4	3.7	400	〃	表裏に磨耗痕あり
27	磨　石	SD－22		11.7	8.3	4.6	630	〃	
28	〃	Pit－16		15.3	8.2	3.9	790	〃	
29	〃	Pit－7		14.3	9.3	3.5	745	〃	
30	石　錘	SD－18		5.8	8.4	2.2	93	〃	
31	石　庖　丁	SK－17		(2.8)	(4.95)	0.7	16	2/3残存	未製品（刃部未作出）
32	砥　石	Pit－25		(6.2)	(4.3)	1.6	44	片側縁・下部欠損	5面を使用
33	石　鉢	E－9	安山岩	—	—	—	410	鉢部一部のみ	34と同一個体
34	〃	G－8	〃	—	—	—	88	脚部一部のみ	33と同一個体

(2) 弥生時代の遺物

① 弥生式土器（第22・23図）

出土量は多くない。殆んどが遺跡全域の包含層よりの出土で、遺構出土のものとしては、第13・27号土壙（ＳＫ－13・27）及び第19・26号ピット（Ｐit 19・26）より僅かにあるにすぎない。いずれも小破片で全器形を知り得るものはないが、壺・甕・鉢・高坏があり、甑はここに分類してよいか否か判然としない点があるものの、他の出土遺物との関係で所属させるべき時期がないので一応弥生式土器とした。 備える特徴から殆んどが後期後半の箱清水式期に属するものである。

壺（第22図17～19）

出土量中に占める割合が著しく低く、小破片が数点出土しているのみである。図示した３点は全て櫛描きのＴ字文が施された頸部から肩部にかけての破片で、幅約２㎜と約1.5㎜の２種類の櫛歯状施文具が認められるが、その単位数は不明である。施文部と無文部の境に径約３㎜の孔を有するもの１点（18）がある。

甕（第22図１～16）

全出土数の内殆んどがこの甕の破片である。図示したものは櫛描き波状文あるいは簾状文、又はその両方を有するもので、口縁部から頸部・体部の破片である。口縁部形態には、直線的に開くものと、外反して開くものの二通りがある。波状文は幅約1.5㎜の細密なものと、約２㎜の粗大なもの、及びその中間的なものの３種類が存在し、中間的なものが最も多い。また、整えられた施文は多くなく、雑なものが多い。簾状文は多連止めの一般的なものである。

鉢

内外面赤色塗彩された底部破片で、底部形5.0cmをはかり、 稍外反気味に立ち上がる。

高坏（第23図４・５）

第27号土壙（ＳＫ－27）と第26号ピット（Ｐit 26）より各１点ずつ出土した。いずれも坏部と脚部の接合部に当たるもので、外面全面と坏部内面に赤色塗彩が施されている。脚部はスカート状に開き、三角形透し孔をもつものであろう。第27号土壙出土のもの（４）は、特に精選された良質粘土を用いている。

甑（第23図２・３）

底部破片で、１孔のもの（２）と多孔のもの（３）とがある。１孔のものは、底部径5.2cmをはかり、孔径3.0～1.8cmのロート状の孔を底部中央にもつ。内面は底面と孔部の境が不明瞭、体部内面が際立った屈曲をすることなく孔につながっている。多孔のものは、底部径6.7cmで内湾しながら立ち上がる器形を示し、径約４㎜の小孔が不規則にいくつも穿たれるものである。精製粘土を使用し胎土良好であるが、外面は熱のため荒れている。 （塩入秀敏）

② 石　器（第20図31）

石庖丁未製品が１点出土している。孔の一部が認められ、位置からして一孔の可能性が高い。

(3) 歴史時代の遺物

① 土師器（第23図６）

坏（第54図６）

内面炭素吸着処理・研磨された内黒坏底部で、回転糸切りされた底部は径 6.5㎝をはかる。全器形は不明だが、一応10～11世紀に位置づけられるものであろう。

② 須恵器（第23図７～13）

坏（第23図７～９）

３点を図示できた。いずれも底部を欠く。口径13.5～14cmのものと12cmのものとがある。体部外傾度は45°～50°で、大小にかかわらず統一がみられる。

蓋（第23図10・11）

頂部つまみを欠いているが、偏平なつまみを有するものであろう。内面にかえりがなく、天井部から直角に折れ曲がる口縁部が鋭い嘴状を呈するものである。

壺（第23図12・14）

小型の壺２点がある。12は高台が付き体部が張る器形であるが、体部上半より上を欠く。胎土は精選された良質のものである。14は円筒状を呈する体部をもつ壺の底部破片である。あるいは瓶と称すべきものかもしれない。

③ 土師質土器（第24図16～23）

いわゆるカワラケの類と内耳土器の出土があった。所属時期としては15～16世紀まで下るものと思われる。

カワラケ（第24図16～20）

口径11.0cm～12.5cmの大型のものと、7.5cm～9.0cmの小型のものとに分類できる。大型のものは、土師器坏と混同しがちなものも存在する。しかし、全体に器肉が厚く、器高が低いのが特徴である。胎土は特に良質でなく、砂粒や極小石粒を含む。小型のものは精製された良質胎土の場合が多く、体部が内彎し、口唇部は丸まる形状が普遍的である。第６号溝址（ＳＤ－６）出土のもの（16）だけ若干厚手である。片口を有するもの（19）は第13号土壙（ＳＫ－13）出土で、口径10cm、底径6.2cmをはかり、逆笠形に直線的に開く。内面に油煤が付着し、他のいくつかのカワラケ同様に灯明皿として使用されたものと考えられるが、片口をもつ点と全体の形状とで若干異質である。

内耳土器（第24図23）

第22号溝址（ＳＤ－22）Ａ区より出土した。口径33.4cm、平縁で２ヶの吊手（内耳）を有し、極小粒子を含む砂っぽい胎土の、ごく一般的な内耳土器である。内面が薄茶褐色、外面が煤けた灰黒褐色を呈するのも普通である。

④ **陶磁器**（第24図24・25）

常滑焼大甕底部２点を除き、いずれも小破片で図示できないが、中世後半から近世にかけての陶器・磁器類が出土している。常滑焼の大甕破片は明るい褐色を呈し、吹き出し釉の白い斑点が多く見られる。底径17cmと18cmの２点がある。

⑤ **灰釉陶器**（第23図13・15）

大小の壺の底部破片が出土した。２点とも高台をもち、15は底径12cmで尖った高台を、13は８cmで面取りされた高台が付けられている。東濃地方の産品であろう。（塩入秀敏）

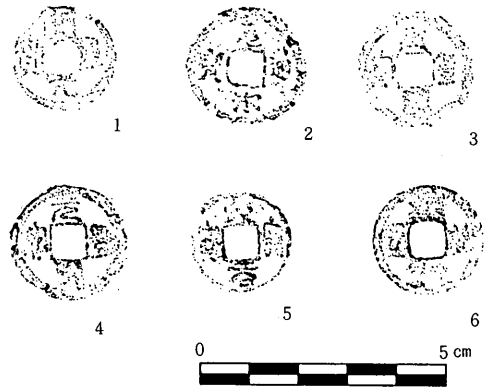
⑥ **石器**（20図32～34）

砥石と石鉢が出土している。砥石は、凝灰岩製の仕上げ砥石で、欠損の為不明な一面を除いた全ての面を使用している。かなり使い込まれたようである。Ｐｉｔ－25より出土した。

石鉢は、同一個体と思われる鉢部と脚部の破片がそれぞれＥ－９区とＧ－８区より出土した。安山岩製で、内・外面とも丁寧に仕上げられている。用途は不明であるが、内面には使用の為生じたと思われる磨耗痕が看取される。

⑦ **古銭**（第21図・第３表）

舞台遺跡では、９枚の古銭が出土しているが、いずれもグリッド出土で、遺構との関連性は把握できなかった。しかし、磨滅等によって文字判読が不可能であった３枚を除いて、すべて唐・宋銭である点は興味深い。これらは、経済活動が盛んになった平安時代末期から中世にかけて、中国から大量に輸入されて国内で使用されたものである。が、そのうちでも本遺跡から出土した『開元通宝』・『皇宋通宝』・『元豊通宝』などは、とくに数多く流通していたようである。かつて発掘調査された加沢の善福寺遺跡では、一括出土した82枚（21種類）のうち上記３種類で約４割を占めており、また上田市塩尻の出土銭においても同様の傾向が認められており、該期における当地方の貨幣流通の様子を垣間見ることができよう。

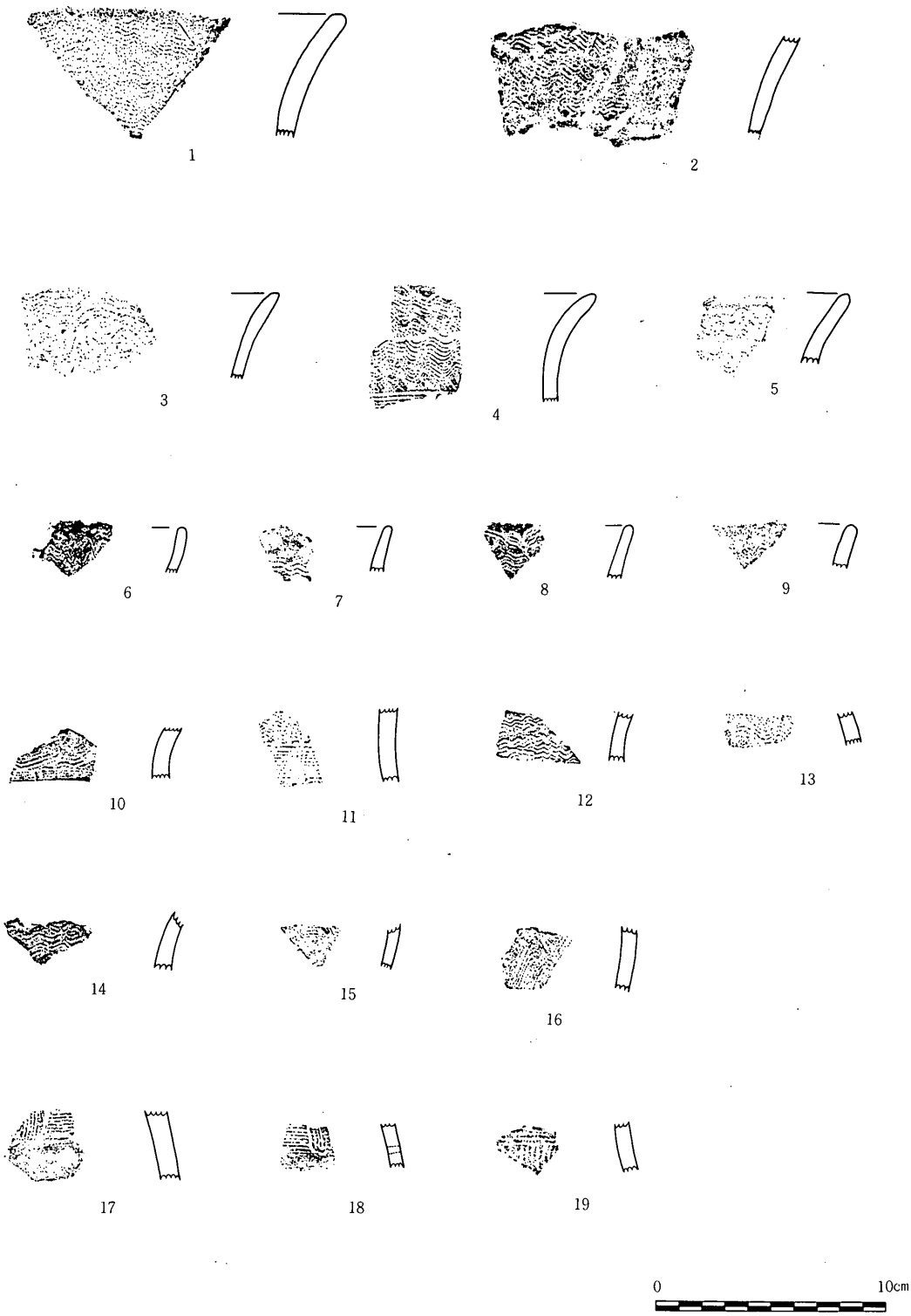


第21図　古銭拓影

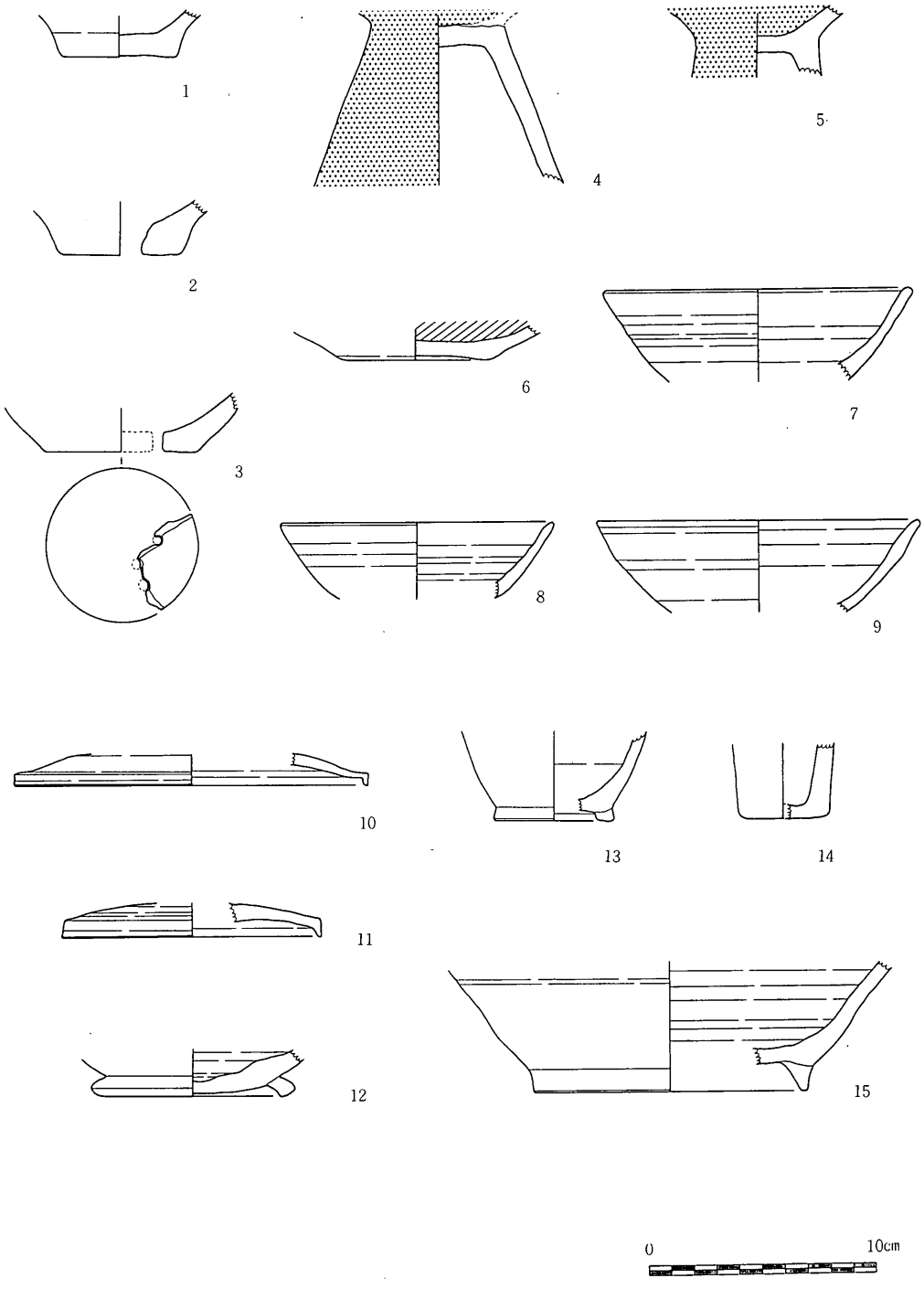
なお、本遺跡付近に中世の館があったという伝承があるが、これらの古銭がそれと直接関係があるかどうかは不明である。（堀田雄二）

第3表　舞台遺跡出土の古銭一覧表

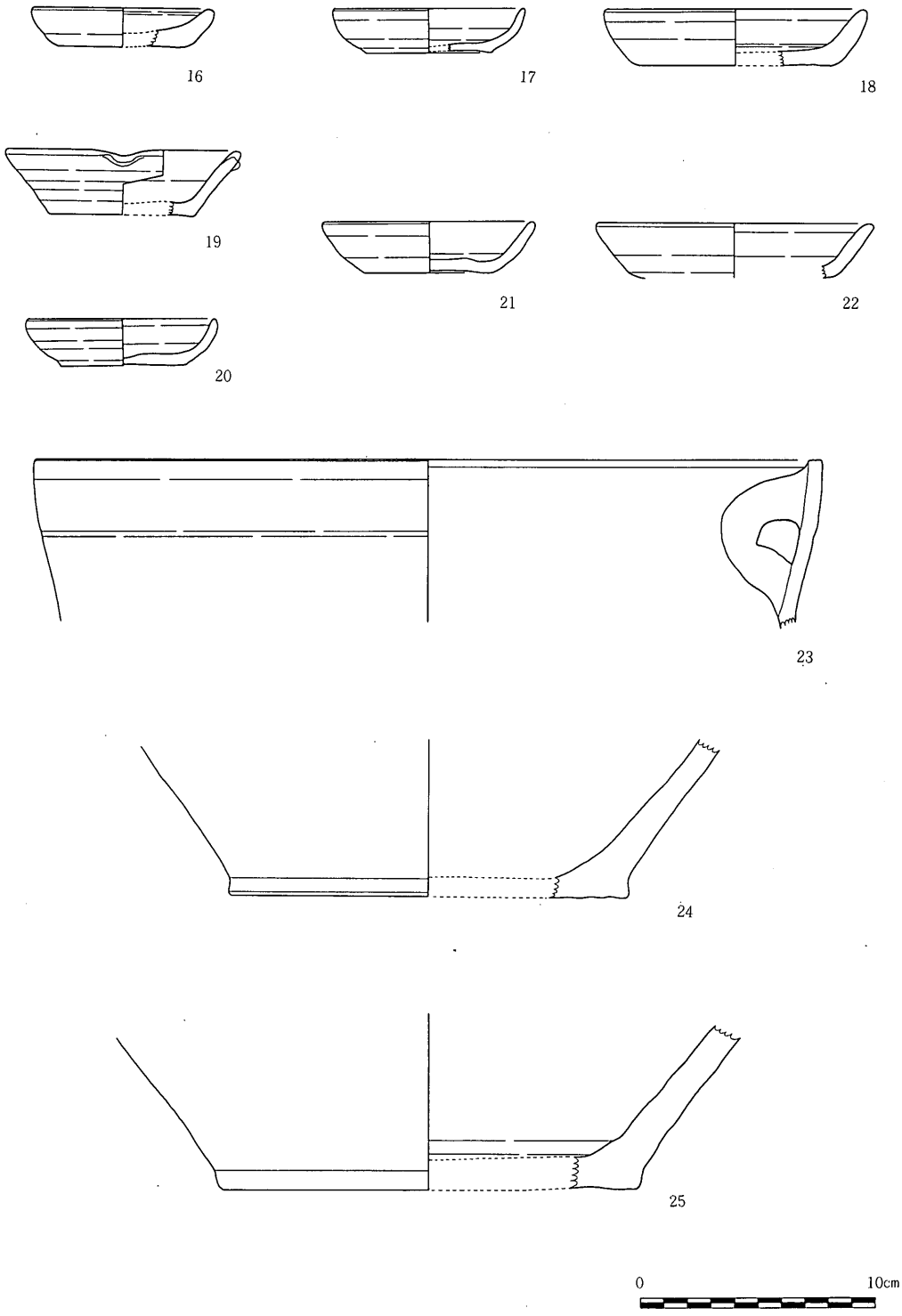
図No.	古　銭　名	年　　号（時代）	西　暦	出土地点	備　　考
1	開元通宝	武徳四年（唐）	621	C－7	輪の一部欠損
2	（皇）宋通宝	宝元二年（北宋）	1039	〃	
－	不　　明	－	－	〃	2に付着の為詳細不明
3	元　豊（通）宝	元豊年間（北宋）	1078～1085	A－5	
4	元（豊）（通）宝	〃　（〃）	〃	E－2	
－	元豊（通）（宝）	〃　（〃）	〃	〃	拓本なし
5	（聖）（宋）元宝	建中靖国元年（〃）	1101	C－9	
6	不　　明	－	－	I－8	
－	〃	－	－	C－1	



第22図　弥生式土器



第23図　弥生式土器・土師器



第24図　土師質土器・陶磁器

第3節　考察とまとめ

本遺跡において検出された遺構は土壙とピットがかなりの数にのぼり、それらの検討については現在のところ不十分と言わざるを得ない。特に、ピットについては総数が324基を数えながらも、まとまりが明らかとなったものは全くない。ピット状のものは、おそらく配列遺構としてとらえるべきものが存在しているのではないかと思われるが、出土遺物による検討も難しく、またピットの形状・プラン等による検討も難しい面が残り、今後の検討にまたれる部分が多い。次に土壙についてであるが、土壙も数は多いものの性格不明のものが多い。しかし土壙の中にも、プラン・主軸方位あるいは出土遺物により類似性のみられるものもある。これらは構築時期や土壙の性格の類似したものととらえられよう。しかしながら、出土遺物は明確な時期比定の材料となるものが乏しい実情でもある。また、土壙とピットが切り合い状況にあって、出土遺物の時期の異なるものの混在する部分が多々みられた。その他の土壙には、覆土内に炭化物を多量に含むものや、骨片の混入する土壙もみられた。骨片についての分析は今のところされておらず、今後の検討にまたれるところである。いずれにしても、これらは土壙墓としての可能性の高いものととらえることができよう。その他の遺構として、溝状遺構・集石遺構・うね状遺構がみられたが、これらについては時期の比定も不明確であり、不明な部分が多いと言わざるを得ない。

次に出土遺物についてみると、縄文時代から弥生時代、平安時代を経て中世に至るまで、幅広い時代の遺物が出土している。縄文時代のものとしては、前期の諸磯系土器が多く、中期・後期の土器も数は多くないものの出土している。弥生時代は、箱清水式土器が主体を占めている。土師器・須恵器については、概ね10～11世紀に含まれるものと思われる。その後、14～16世紀に含まれると思われる土師質土器があり、中でも完形の灯明皿がいくつかみられ、また内耳土器と思われる土器、あるいは常滑系統の陶器も混入している。しかしながら、これらの土器は小破片が多く、また遺構と直接的に結びつく遺物も少ないのが実情であった。

以上大雑把に遺構および遺物についてみてきたが、土壙については時期不明なものが多いものの、縄文期と平安期のものが主体を占めているのではないかと思われる。ピットについては時期の知れるものは僅かであるが、縄文土器のややまとまりをみせるもの、弥生箱清水期の高杯の一部が出土しているもの、また完形の灯明皿の出土しているものもあり、かなり幅の広い構築時期をみることができる。またグリッド内出土土器をみると、わずかの深さの覆土内に異時期の土器が混在している状況もあり、何らかの形での流れ込みもあったのではないかと考えられた。調査区域北側にも遺跡が続いている点も併せて注意しておきたい。

いずれにしても、数多くの遺構および遺物が今調査において発見され、本遺跡の性格を知る上で重要な資料となろう。

（五十嵐　幹　雄）

図　　版

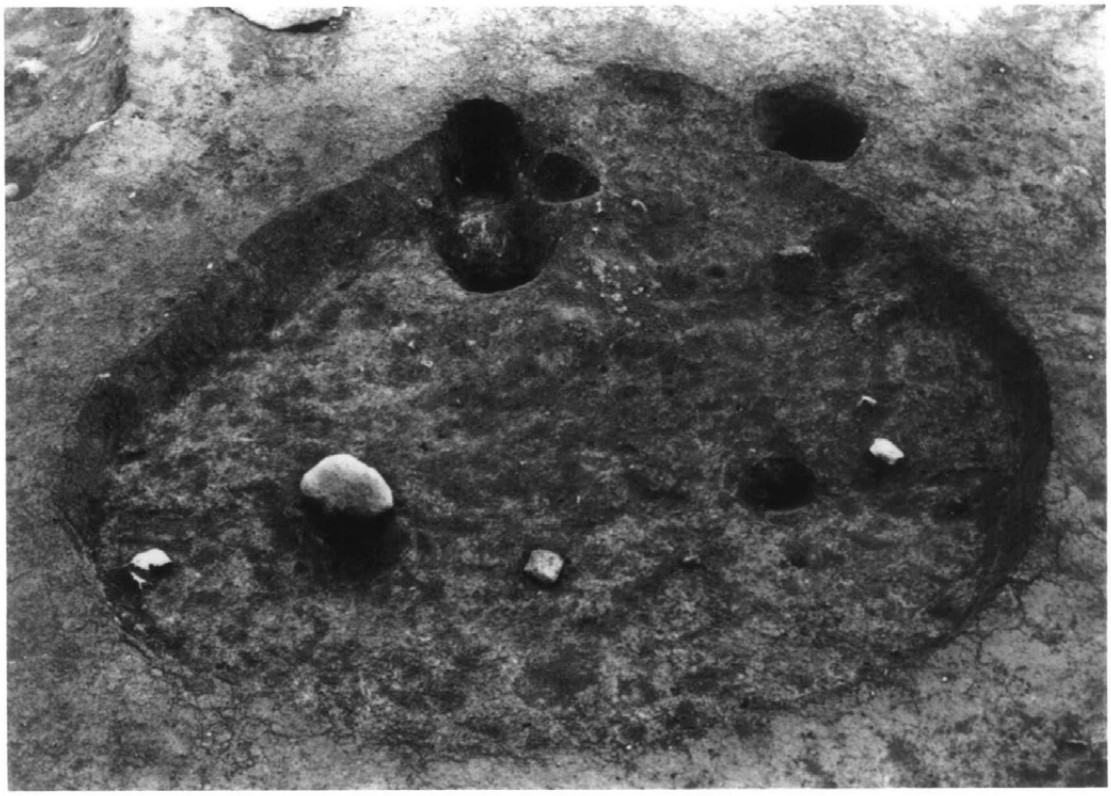
図版一　舞台遺跡

遺跡西側（南より）

遺跡東側（南より）

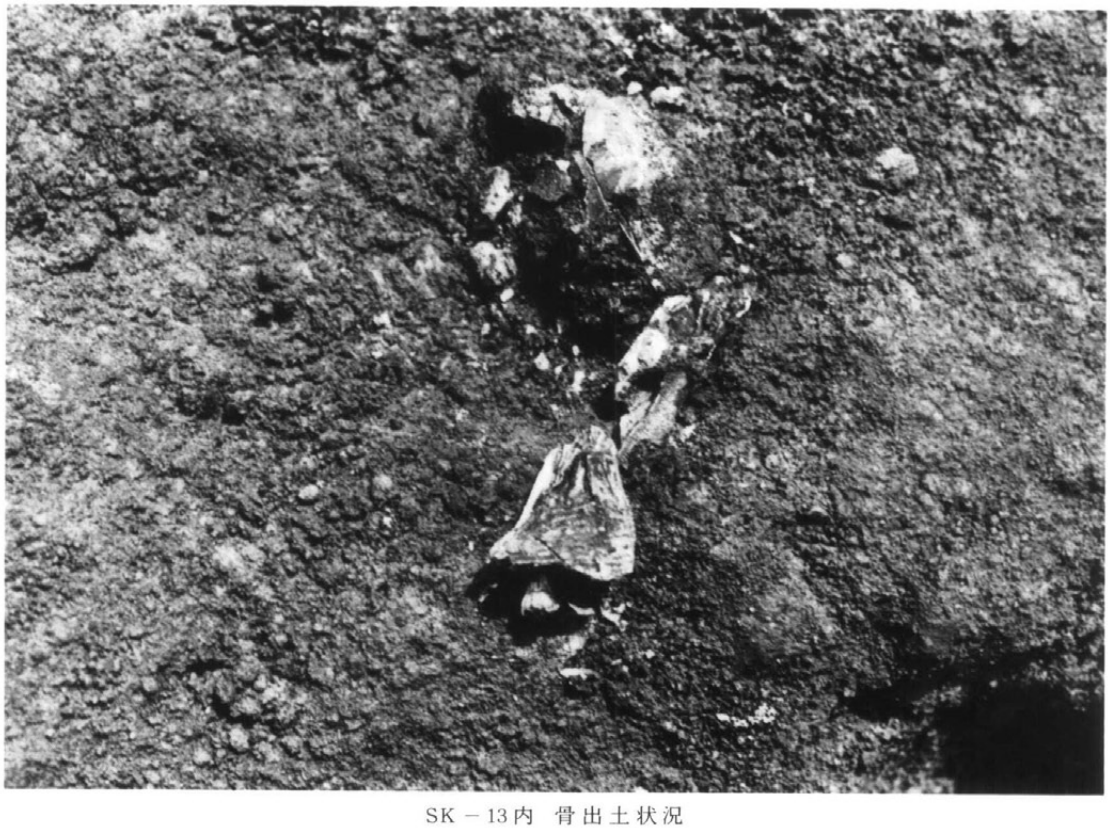
図版二

SK－03



SK－05

SK－13

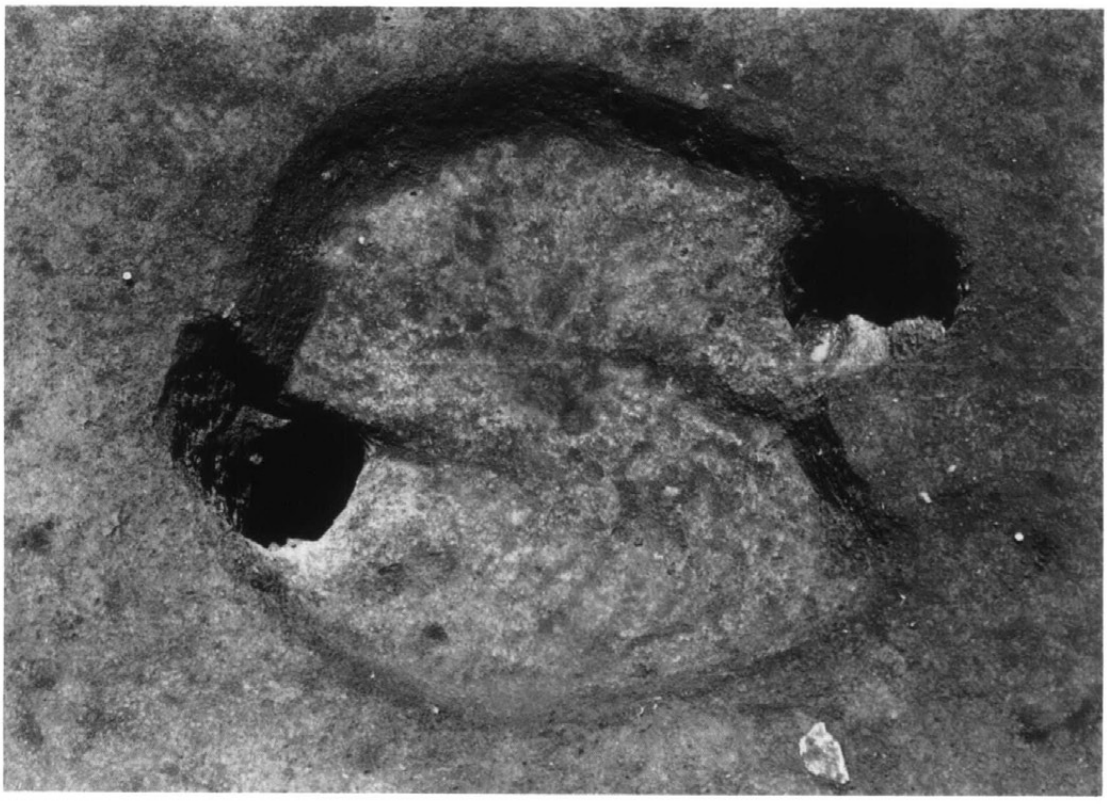


SK－13内　骨出土状況

SK－13内　骨出土状況

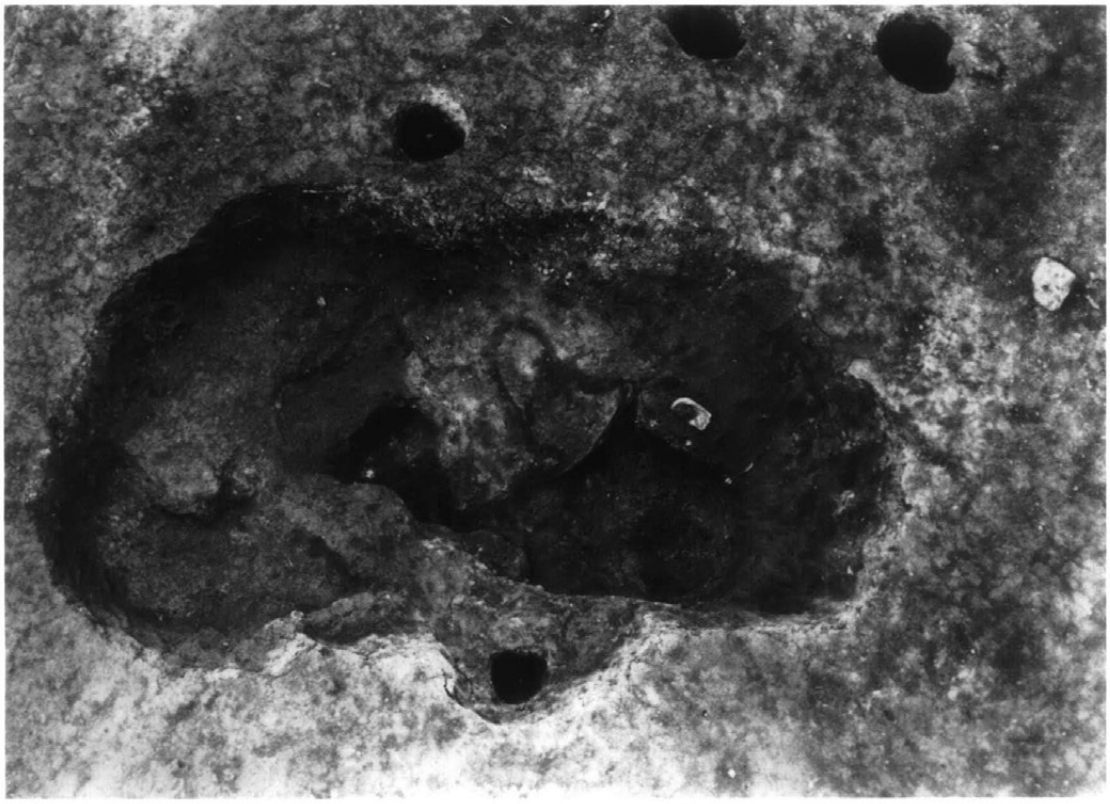
SK－15

図版五



SK－16

SK－17



SK－27

うね状遺構（西より）

SD－13内　土器出土状況

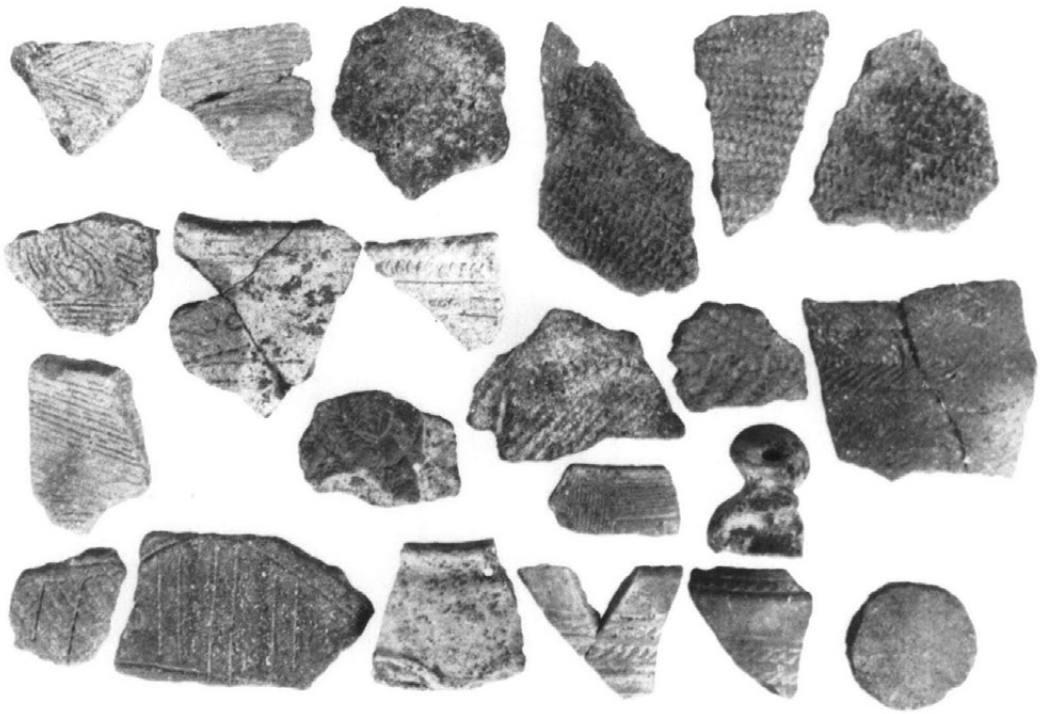
SXb－01　半截状況

図版八

礫群及び石列

Pit −1内土器出土状況

縄文式土器 (1)



縄文式土器 (2)

石　　器

古　　銭

あとがき

東部町における昭和58年度の埋蔵文化財発掘調査は、塚穴遺跡・舞台遺跡・鞍掛遺跡・天神遺跡・戌立遺跡の5遺跡について行われた。これらは全て記録保存を前提にした緊急発掘調査である。このうち、戌立遺跡は2年度にわたる範囲確認調査の初年度であり、報告は完成年度に行うことになっているので、ここでは塚穴遺跡以下の4遺跡について調査結果の報告をするものである。

調査の結果は、遺跡毎に独自の性格を有しているが、縄文時代創草期から近世に至るまで、非常に長年月及び多岐にわたるものであり、東部町の歴史を解明してゆくには欠かすことの出来ない資料を提供することになった。特に塚穴遺跡の縄文時代前期土器は、東部町としてはまとまった好資料である。

いずれにしても、まだ肌寒さを感じる頃から炎暑の夏、そして秋風の吹く季節まで、労をいとわず連日地味な作業にご苦労頂いた作業員の皆さんには本当に感謝申し上げる。このような人々の努力の中から埋蔵文化財保護の気運も芽生えてくるものであろう。また、土地所有者の方々、東信土地改良事務所・役場農政課をはじめ多くの関係者から好意的なご協力を賜った。文末ではあるが、報告書の上梓に当り記して深甚なる感謝の意を表したい。　（塩入秀敏）

舞台遺跡

—緊急発掘調査報告書—

昭和59年3月20日印刷

昭和59年3月30日発行

編集　東部町遺跡発掘調査団

発行　東部町教育委員会

印刷　鬼灯書籍株式会社